東海道名所圖會 二

東海道名所圖會卷之二

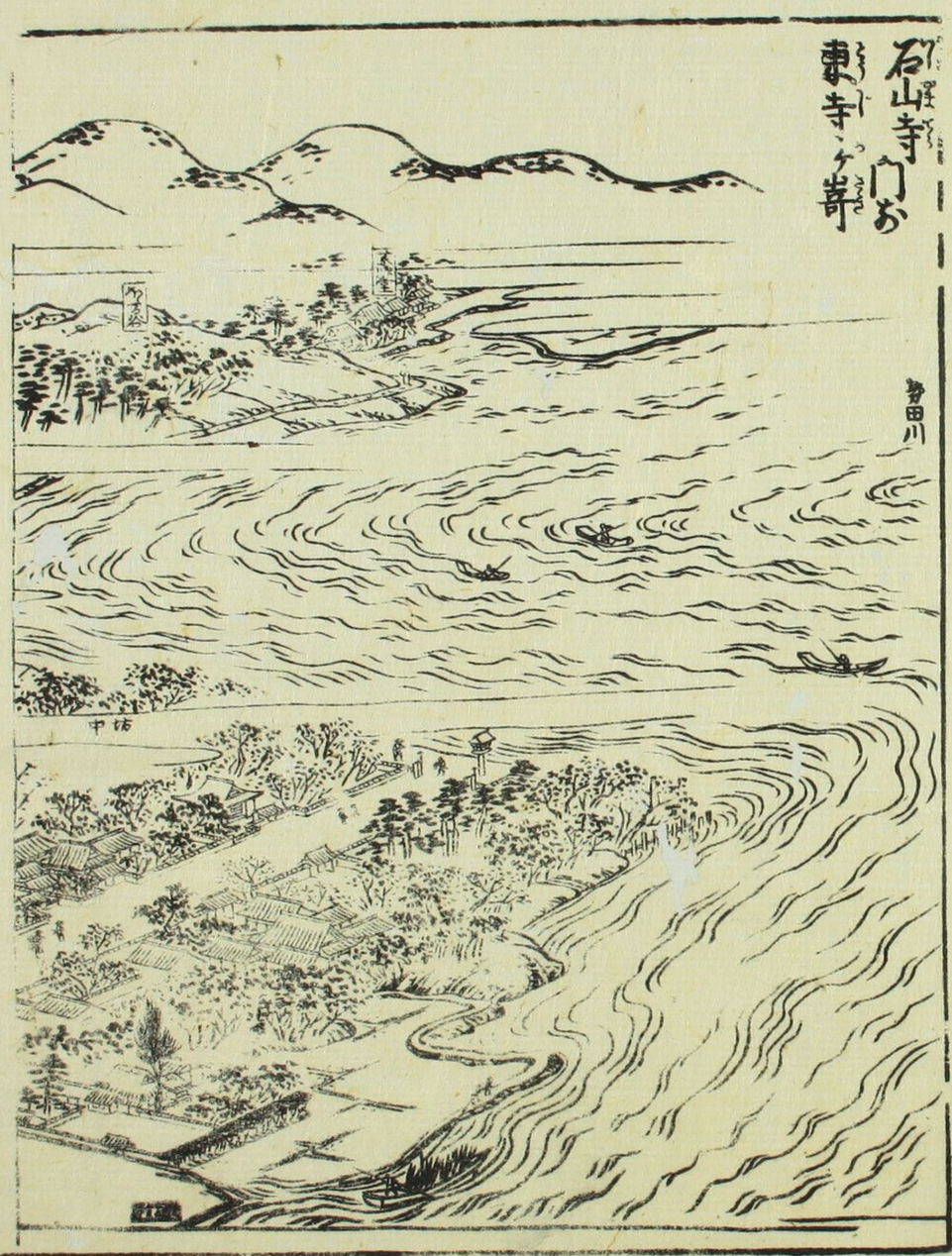
目錄

石山寺
古硯圖　頼朝の墨　やどり木　食堂　龍燈權現　奥門跡　行履岡　舍那院　毘沙門堂
岩間寺
田上不動
龍神祠
野路玉川
石津寺
御霊祠
勢田橋
建部神社
矢橋
○草津
幻住菴　蕉翁
秀郷祠
月輪池
鞭崖八幡
立木祠
谷上川
琵琶湖
野路篠原
山田石直
陀羅尼谷
空明菴　新宮明神　古跡　東大門　龍穴　比三所觀音
東寺金剛
不動井　虎御石　影向石　比良神社　鏡石　經藏
不動堂　阿弥陀堂　紫式部の墓　智證大師佛舍利塔　八葉巖　天師利鑒名跡　三十八社　鏡石　經藏
備子石　石山寺額　義平の墓　江州勢多　蛍谷
多宝塔　御影堂　南院　不動尊　小屋谷　僧院

常磐舍藏書印

常善寺
灰冢山
三上山
石部鹿鹽上神社
西寺
夏見
榛田川
○水口
大圓寺
（末社十八所權現）
山上庚申
義朝着浣水
○土山
活人石銘
鈎古城
御上神社
金勝寺
（大石塔婆）（渡堂跡）
東寺
（樒）
日雲靈跡
岩根若水寺
水口神社
飯道寺
（本社大黒天）
（護法石）（足跡）
（龍化石南無阿彌陀佛）
今慶背鏡石
山口重成碑
田村明神
草津川
小野寺
新若光寺
○石部
金勝寺
調貢
魁儡
妙感寺
（万里小路藤房卿終焉地）
平松村美松
阿弥陀寺
梅木（是齊和中散）
貝川
（本堂御本尊平）
（大師堂前の傳佛）
（大師堂白山祠）
（閼伽井）
（遍照石）
（山伏塚）
（弁財天祠）
（藏王堂）
（鐘樓）
（女淵の神事）
（東海道）
（恩川）
矢橋郡三滿宮
蓮華寺
慈安寺
景清力競石
義經腰掛石
杉尾川
田村川
瓣阪
○庄野
○石藥師
杖衝阪
安養寺跡
建福寺
毛川屋跡
名產白粟
長圓寺
光德寺
○栗名
一本松
十念寺
矢田八幡
壽量寺
泡洲崎八幡
○四日市
那古濱屋樓
（名物燒餅）
○桑名
志氏神社
三重川
日永
○追分
出羽塚
森下
○關
八十瀨川
劍峯山
○坂下
地藏堂
帝氣神社
（本社劍峯社）
劍神社
白鳥塚
稚武彦祠
國分寺跡
采女村
劍阪
劍神関
琴之橋
惠薗藤
古馬屋
瑠璃光院
（山号赤人古蹟）
追分（桑宮道）
桑宮道
○龍山
諏訪祠
垂坂親者
町屋川
天武天皇社
願證寺
（本社十八所權現）
山上庚申
義朝着浣水
○土山

栗名神社　祠社　母山祠
輪崇寺　寛平法皇宸筆　聖二天祠
御寶殿　什寶
大圓寺　中堂　觀音堂
不動院　鐘樓
間遠渡口　朝祥峯　西行菴　上覺寺
津嶌波　藻の舍
甚目寺　本堂　金鼓
阿波多祠　藏書物
龍龍尾　本統寺
大福田寺　本堂　觀音堂　什寶
佐乃富神社　本社　立石　八重梅　七色梅
中臣神社　末社五社　長尾山　岩窟
法盛寺　經藏　鐘樓
佛眼院
楊柳寺　本社　八王子　弁財天
最勝寺
多度神社　本社　末社五社　多度山　龜尾山
伊勢海
洋嶋天王　本社　屋敷祠　滿五帝座　八王子　弁財天
佐屋　御宮　是佐屋
萱津里
反魂家
阿波多浦
阿波多杜
豐太閤御上洛古蹟



石山寺
中院

石光山石山寺　志賀郡石山ふ　真言宗仁和寺御室ふ屬ス
西國巡禮十三番札所

貴こ〻ろ志く法もとめる石山の月もひかりを空を来て照る　貫雲

石山寺主故集大意
天智天皇をぐわみ大津の宮ふ在せ〻御慶事の佳瑞をりく往古の聖跡成示〻なをしめさ〻荒縁をきり拂ふく伽藍の經營こたいさ〻至らば故ふ縁起ふ云　天智帝の御宇ふ山のあうて紫雲ふたなびく天皇おやゝみ給ひ勅使を遣〻そ見せ〻れ〻るふ山の半腹ふ八葉の巖石のうへふ寺をそひさそ〻り多宝如来の像を安置し給ふ〻ふ光彩赫奕大聖垂跡の場地ことを又實隆内府勧進疏云樂々波大津の宮ふあ〻ふ〻光彩赫奕の場ふ〻く地形乃蓮座ふ似たり云〻一百の皇霊を經く時機淳純熟〻こゝ聖武天皇宸襟の志ふ〻良辨僧正を〻く伽藍を建立ゼ〻ひやゝむ〻上宮太子より歴代稟承の御持尊を八葉の巖石ふ

安置〻一百代の皇祚と守護〻萬世の勅願を祷給〻ひやゝ

○本堂　天平勝寶元己丑年良辨僧正開山供淳紹中興の志ふ〻〻〻もろ〻〻第一層二年二月二日開祿倉武衛頼朝公再興〻ひやゝ建久の頃ふ燼倉武衛頼朝公再興〻ひやゝ荒蕪ふ〻〻豊臣秀頼公修補の功ある今の本堂これ之

額　當寺諸伽藍者江州北郡淺井備前守息女亞相秀頼御母堂為二世安樂御再興也

○本尊二臂如意輪観音　御脇門ふ篭る本尊長六寸の縁ふ聖徳太子の御持尊〻数多伝正壇佛を安置〻く文六の巨像とはそ〻く〻ふ傳を藏申ふ〻〻百王の資祚を祈〻延喜十七年七ヶ日ふ法會あ〻く教命をうけ〻り〻〻初〻あ〻り其〻代々の帝王ふ〻〻〻

八葉巖石　本尊の御坐ふあ〻り金輪際より涌出〻く〻

脇士　左執金剛神　右金剛藏王

不動明王　本堂の内陣ふ安置ふ〻〻

普賢菩薩　内供淳紹の御住房著賢院ふ傳来の

五智佛舎利　弘法大師の作　阿弥陀佛　著賢院ふ傳来の

二十八部衆　毎日の供物を〻く　持宝院ふ傳来の

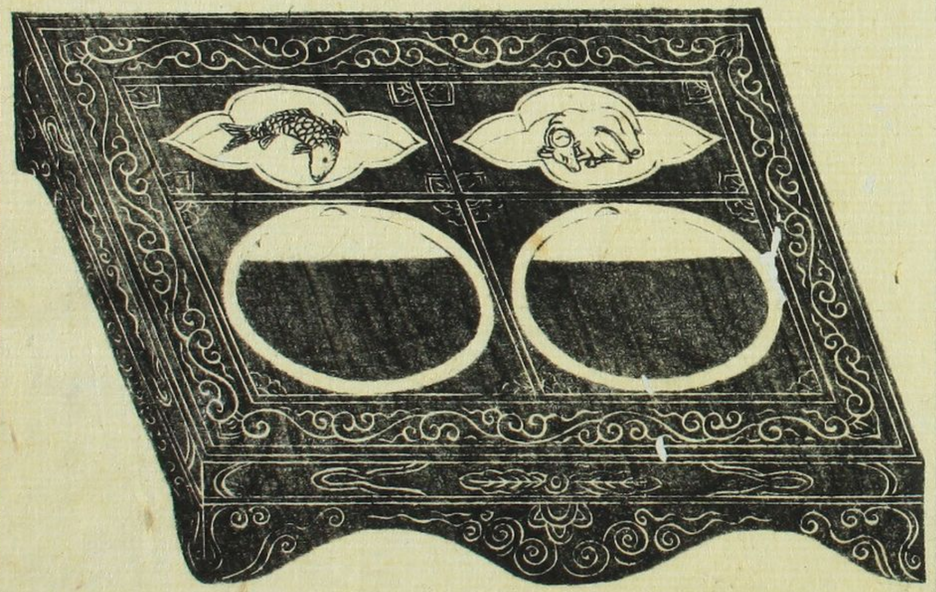
四天王　毘沙門天　増長天　廣目天　持国天

十二神将　子　丑　寅　卯　辰　巳　午　未　申　酉　戌　亥

弘法大師剃髪名跡（供養法師の観覚傍正と倶ふ大師の剃髪を得給ひ
當寺寶一の寶寶たるより久く
水繰り古金襴ゆうそれを石山ちれしとく世に名そ
（源氏間　本宣の傍ふありむかし寛弘の比紫式部此寺に勘竜しく
源氏物語を作りし折く故ゟ源氏の間といふ
石山記云
式アハ右お衣着原ゟ時朝臣の女上東門院の女房ゟ久く仕うる
一条院の御伯母選子内親王よりめしらしかゝゟ給ゟあるゟ女院へ申
うせうる給式部ゟ作く作らせ給れハ此事ゟ申さんとそ當山ゟ
七ヶ日ゟりゐるゟ湖のうさはるくと見つゝうれくんとみく給ふ
風情眼ゟ遮うゟゟ給ゟ給ゟあるハ次大般若の料紙の内陣ゟあ
本尊ゟ申給ふ号ひあくゟ風情ゟ式部ゟ書給ひけゟ
ゟうれゟ日本紀局と号ひゟうゟ
源氏ゟ事一絹ゟ給ゟ非人間之新篇不可説之事也ゟ二哥秀逸是
又ゟの人及之我朝之最上也之ゟゟの序云
ゟゟゟ給へ〳〵こゝろ

石山寺什寶
紫式部古硯
世謂石山形

竪　寸三分
横　寸四分
厚　寸三分



風藻空餘湖上秋
水澄吞月水悠々
濡毫慙女今何在
一片研池萬古留

鶴山畑維龍

清輔袋草紙云
紫式部ト云名有二二說一此物語紫ノ巻ニ作ル甚深之故ニ得ル此名一ニ者一条院之御母之子也而ノ上東門院ニ令レ奉レトテ吾ユカリノ者也アハレト思食ト令ン申給フ之故ニ有ニ此名一武藏野ノ義也
河海抄云
八月十五日夜の月湖水なみ〳〵とすみわたりて心の澄ワたるさま〳〵ふかき物語をワたくしわざとかゝせ給ふ
仰有の大般若経を次ニ明石の尼君の書写の事を書初ムルよりはじめ〳〵ゆくまで権中納言行成の清書にて三合六十巻なり
秘蔵ひ一心三観の妙理を悟る事を得ん
長明無名抄云
物ものゝ出源氏作り出る事は延喜の御門の御時に
おほせごとにて作り出たるとぞ
惟中無名抄云
源氏ハ和国の奇異之細川玄旨
法中の庵従ふ文本孝庸といひし
武士因州の牧ふ仕給ふ年の時より
随ひて多曲ふ傳授〳〵ふ義絶うめぬ
この故ふ孝庸
玄旨法中ふ世間の便ある書ハ
源氏ものがたりと答申ひしより哥學の物語ハ
源氏と答ふ也申ふそ何ものも源氏ふくすみ物の事と第ふ源氏と百遍
ほゝさふ尽ふるりの名ハ哥學の成就之と宣ふ〳〵孝庸ハ物ふ
源語秘決ふ云一巻ふ源氏の大事を十五箇条ふその目録ふ
一ゆふがほ　源氏の服有無の事
一夕顔　侍童着物貫事
一わかむらさき　大納言の隨身の事
一すえつむはな　ふりいでゝ後ハ
一紅葉賀　まくあさの事
一花宴　をとめ
一葵　葛中将の事
一賢木　ふちのうら葉　ほいさゝろの月のふ
一花散里　大堰の大事ハ　楼名の外　林のこと
一須磨　ようみをひげのふ也　さすがの有人ものさま
一明石　ら海ぶ〳〵ふをかし
紫式部畫像　源氏の間ハ今ハ新の新源ハ物聖の
瀧ハ迎爾三獲院信基公の筆あり　古右通
讃曰
有門空門亦有亦空門非有非空門
あく浪さふいふ物ふ有ぬりひ〳〵ふれを　通顯信基公
浮き世にかゝる〳〵てんかゝれやと　令

天台四句文を讀くかゝる事も侍ふつたなうたゆくある事多や

（止觀第六文）

（出海抄云）

式アハ檀那院の贈僧正の許可を蒙てうつゝ紫雲立林院の幽閑を占ひ

硯石　源氏の岡の畫奏うたゝ式アが所持の硯ぬ石山の石なめく紫色瑪瑙のやうに光ありて海二のあり觀ぬ事一經の形を畫く日月佛陽の象を顯し經の方に濃く牛の方に淡く

大般若經　式アが自筆の大般若經今も寺の什寶なり源氏の岡式部紙表紙古代の紙なり今も至て美麗なり

○二十八社　紫式部石塔　伊勢物語

○經藏　一切經を納る

○二層多寶塔　建久の比將軍頼朝卿の建立なり

○鐘樓　中堂の北にあり

○御影堂　三昧堂或は法華堂ともいふ

○觀月亭　多寶塔の北にあり或は大觀亭ともいふ

○亀ケ谷禪尼塚　頼朝卿の御乳母

中央弘法大師　良辨僧正右内供淡海

當寺僧寶傳巳

良辨　淡海氏の子母堂に於て東大寺に於て受戒す

巳長而出家す

聖武帝敬崇し給ふ

帝創て東大寺を鑄る

帝師寶字四年勅して鳥ノ薄此時遮那ノ銅像を鑄る

本邦未有黄金乃勅ノ使ひ金峰山金剛藏王ニ祈て金ヲ以て資銅像ニ薄ク入一山持念ス

夢藏王示ス近州湖西之地ニ就テ彼持念必可レ得黄金ヲ辨便尋テ至ル安帝ノ所ニ授ル如意輪ノ像ヲ此像益ス自聖徳皇太子ノ時ニ有ル僧ノ持ル尊即チ六寸金銅ノ像ヲ還ス叔レ者ニ始テ貢ス黄金ヲ辨ス叔レ像不レ動ニ巖坐ス乃チ具ニ狀奏ス像也巳ニ修念不レ幾自ニ奥州ノ始ニ帝先ニ于東大寺ニ敕ノ安ス伽藍勅ノ名ヲ石山寺ト當ル夷ニ基ヲ趾ニ地中ニ得ル五尺ノ寶鐸益ク以テ爲ニ靈地ト加ヘ詳ニ載ス寺志ニ辨ル以テ寶亀四年閏十一月十六日ヲ化ス云云

延喜の初年一聖感夢あり觀賢淨祐おはしまして座主を傳ふ伊賀の國司藤原遠州志賀郡の人となり相撲の國司藤原屋太郎太夫時忠のるみ出誕の假に此寺に參籠ありて金色の聖母現じ給ふ赤子を抱給ひて堂に

昇りぬしあり故郷忘れを大山寺名物を出す所
相遠あり名物まき柄州の下に希
○八重櫻 門前堂の西にあり枯く世々植継ぐ
石垣の堂けまくらくろの西にあり
うらやそいそのうら山櫻あらん旬ひを風まち給へ

○影向石 日前にあり観者
影向のいしとも
○船繋石 比良明神船をはなつ所
○倚子石 婦人の安座をなす
○蓮池旧跡 聖徳太子勅願寺の一
○猪南院毘沙門堂 石壇の上にあり
○食堂 長六尺 伝教大師の作の観音
○比良明神影向石 舎堂の南にあり
○手水石 俗に
○不動明王 中むかし愛染
○龍蔵権現 当山の鎮守
○世二折観音堂 中比信尼
建立

○閼伽井 下壇の北にあり昔より観音
○谷川 朗詠集 泉飛 雨洗 聲聞 夢 葉 落風 吹 免 相 秋
○奥門跡旧趾 今田圃と
○天狗杉 山の入口にあり
○柳為 天狗杉の西にあり
○尻掛石 山家のおく
○龍穴 奥三町にあり
○尼塚 山家のおく

うち出現しく和尚感恭敬し
朗詠集 暮雲波路遠雲千里 白雪山深鳥一聲 直幹

○義平墓 そうりみち 於穴ふう 町二
鎌倉の逸源太義平 迫石岡石山寺の辺なる悪び居 久保紙経塚之南 経塚
弟等生擒く六波羅へ引て 義平未の軍 おすけく
生年廿二 平治物語 平治物語 今の物語の
此所 ふく 為のびく 当寺 異聞
たうさく山中小石のび 石塔 建之 年中
納房駅向ひ逆 捕且 其逆者の 石碑を立 也 伝へ
此義平の首を かけ 前に二条 さる 舎人 至 粽 居
もるく空地へ 都名所圖會 拾遺 谷の谷 此 処
○小屋谷 以 それ谷 といく 此辺の
解党 石 所
乙 ○庁屋岡 岡山の 絶頂 といく 内
讃 そ 昇 ー
○東大門 東方二王門 といく 都て 今の
鎌倉将軍頼朝公 建之 年中
志類を 記 ー 此門も 東大門 安に 遷慶 港慶
弟 其 随 ー といく 二金剛像 の 仏
石山寺額 筆原行社 書 額の 脊面に 仁治元年十月十三日
の石山門内の堂塔の名蹟之 当寺 房の旧跡多 一 界之 現存の寺院門内
のみ 寶性院 明王院 吉祥院 南 法輪院 密蔵院 持寶院
世尊院 圓乗院 門外の西 松中坊 中西坊 西 坊 東 岩本坊
岩本坊 梅本坊 東地坊 多聞坊 湖月坊 等 く

此院中 持寶院 いく天文の 此 まて 倉之 坊 ひー く天文廿四年
八月 称名院公條大覚寺 門跡 准后 紹巴 宗吉 あ 各 多 く
九日の會莚 あ く千句の連歌 あり
さる 石山 月 句 と いく
彩古今 石山や 月 ー
都 みもく人や 淀つ くんいー やまの
後拾遺 そ 淀成順石山 なこりう ー 川
つくるめ 志 あ とのうみいかく
秋通勅名女 ありひかけく石 秋の秋乃月 石山寺
ありうくわそん年 此 行 門跡准后 紹巴 宗吉 あ 各 多 く
あ ー の 美 そ ふく女のかく
かく ん をうく いひつう ー て 仏
うたそ みく はう ー 々 仏
いのうたむとこ 沙弥 そ おきうそ 志賀の浦 沙弥満誓 四条中納言
ふく 仏 を ー 仏 う 女 こ 仏 ふ
石 ふ ありひて 仏 れ 漢仏 々 仏
意 ー ともつを れやいもるかく 石山 月 志賀の浦 柿本人麿
後拾遺
都 ふく 淀川 こ ふ もおりひ ふ へ そ ふ
石山 秋月 石山秋月
わ 大納言 氏 漢拾遺 こ そ ふ ひて 仏
石 ふ ふ く 人 そ に 仏 名 々
私 おの浦 小 仏 こ も 私 そ 来 月
いー ふ や 月 そ 月 の 名 け さ は 淀 あ ー そ も 二 仏 か 々 ふ ん


石山
螢狩
山日人


新古今
春泉齋

石山　秋月　秋風蕭颯渡一入涯霜滿天山不帯雲
詩、相國寺林長老　古木　聞一岩　寒月影吟殘葉々露中花
歌、延喜第四皇子　いしふやまのうみてる月影もいはねをあらふなみ

天石山寺を草創ありし年堂をも造営ありしく延暦二年にも双びなく郁芳門
一千有餘年小建つて僧正良辨勅を奉てあらたなる霊夢に安置持念
せる本陸奥の金を以て貢る白髪の神公殿上に泥を塗りく
霊迹たる事を示し紫式部が湖月を賞して源氏を著し瑞垣の古硯が
ちびむ本堂が巌上に建なく真如の月を映す崔嵬たる巌石層々として若向岩取硯
寶塔所〳〵より淺みが連峰山我そゝりて岩間岩取硯
て峰嶂する中に壺湯あり茶毘所が湖水の流に淋花ちりく今古物語
月を浴して古来石山の秋月八景の一勝なる漁舟つゝみ入て供御の頻へ
下〳〵の月さはりの深き蛍見とそ
声梅の香もつまなく美景をかちて大日山より飛来る蛍火多の数なれば
名産となく石山の蛍を他所よりも極なく大きく光も強しあれ風土のおと

西國巡礼　石山寺　観音
真如催次番り〳〵より古人の秀詠多く代々の勅撰集も多く出よう
三尺の童子らも皆人知の筆紙の表書ま石山秋月と記するも貴とみく
袖とかく山名勝を賞ぞるの専あるべし謝荘が月の賦ま清賀の悠々
たる筆に行富縛ある事が俺ひ長治の秋を騙ぞ

とゝ石山めぐりの事あるべし

勅撰　石山寺にて暁月といふ心のうたをよめとありしに
石山や月待ほどの夜半の間に雲もなくなる秋の空かな　前参議教長

山寺にて深き石山の名をよめとありしに
月ごろ巳下石山寺門外の名所

○東寺ノ辻　大門の傍にて石山より東へ行る所
東寺ノ辻ふ　猿ふ

○螢谷　石山より勢田への間にむかし〳〵より聖生成禁ト
潮水の流れ山ぶもの陰にあり初夏の候より螢多く集く
或ハ憂橋又浮舟橋ともいふ石山所の名勝螢谷より流ま望む溪門の橋之

○浮橋

玉葉集　園融院の石山ふおもしろくてよめる
巌上人〳〵もろともにおもしろくて始くる九月晦日

和元也少るみちをみちのくにふかいのまさたのをかのをかのかやかなかれ
源紀云寛和元年八月廿日 国融院帝かくれ給ひて
石山なる仏のもとにこもりおはしまして一日に燈
○荒痛茶所 石山寺の巽の方にあり石山寺の別所
本尊不像茶所日光月光十二神将の像あり縁起云延喜四年石山寺開基の
時龍女此堂を造しく其鬢髪を納るとて今に荒痛と
林ぞの東に茶刈畑成山石仏あり 仏躰とおぼしき
へ仏像係く繋くあくまで一字仏建こ海亀しくくる
寄聞といふ人尚寺仏再建しくく焼滅も係くる
○空明菴 深州え改法師の老母の古跡と
くありく土人部屋を感得しくく
石山のやうにあり仏像を感得しくく
あるく昔の詩稿かと茶山集たの
○城墟 城のある護神と長八尺半の天像威毒の相ぞと
あり今民間たゞ孫あり井上
○毘沙門堂 城の艮に小祠あり
○新宮明神 石山の鎮守 寺を距る村の生土神 例祭三月
二日 条神は熊野の新宮尚社むしろ 饗をまふ!く
今は神輿一基のみ つゝく 武久しく紋ゐ又傾壮と
あり新宮の
所旅所

○財川 石山西郷の中にあり御坂へかゝれる川之石山寺の政所
財川 後後ち居宅の古迹之故ゐ名くる
石已上ハみな石山寺ゐ属ス

岩間山正法寺 石山の奥岩間にあり 真言宗
西国巡礼十二番札所
長四寸三分金銅仏 越の泰澄和尚の持念仏
脇士左右祥天女 右葉相仙人 越泰澄半 救た身を放光
それ当山ら 元正天皇御宇 養老年中 越泰澄半 救た身を放光
安置一 様 半跏金銅千ゐ北る係ら 建立
坐禅若形しく 年 桂樹 ゐ 千二年ゐ及ふ又伽藍の西南子
竜 ふく 足を跡 醍醐 等身千ゐの仏ゐ他て彼金銅の小像
醍醐 岩間石山の間ら山路ゐく 巻ふ西国順礼ハ歩
陀羅尼谷 石山ら醍醐へ出る山中の細道之古傳云供僧結師の観賢
僧正の許へ日々ゐ通ひ陀羅尼を誦しく 陀羅尼
御霊祠 ゐ多格面形の面ふあり多居川村小大結村の生土神ら
例祭三月三日

糸神大友皇子 相傳ふ仏皇子清見原天皇と会戦しゐ大友皇子遁
ずまけ仏ゐ田格ゐ
別所常在るの山中とくふ ゐ田ゐあくる事日本紀云 大友皇子左右
日本紀云 大臣等僅身免以逃之
男依等即軍ニ于粟津ノ罪下是ノ日羽田公矢國出之
雲臣狛合共ニ攻ニ三尾ノ城一降レ之壬子男依等斬ニ近江ノ将犬養連五十君及
是大友皇子走無所入乃還隠山前ニ以自縊焉

櫛の
すろ
朱き
岩田の
奥

笠取山

雑木

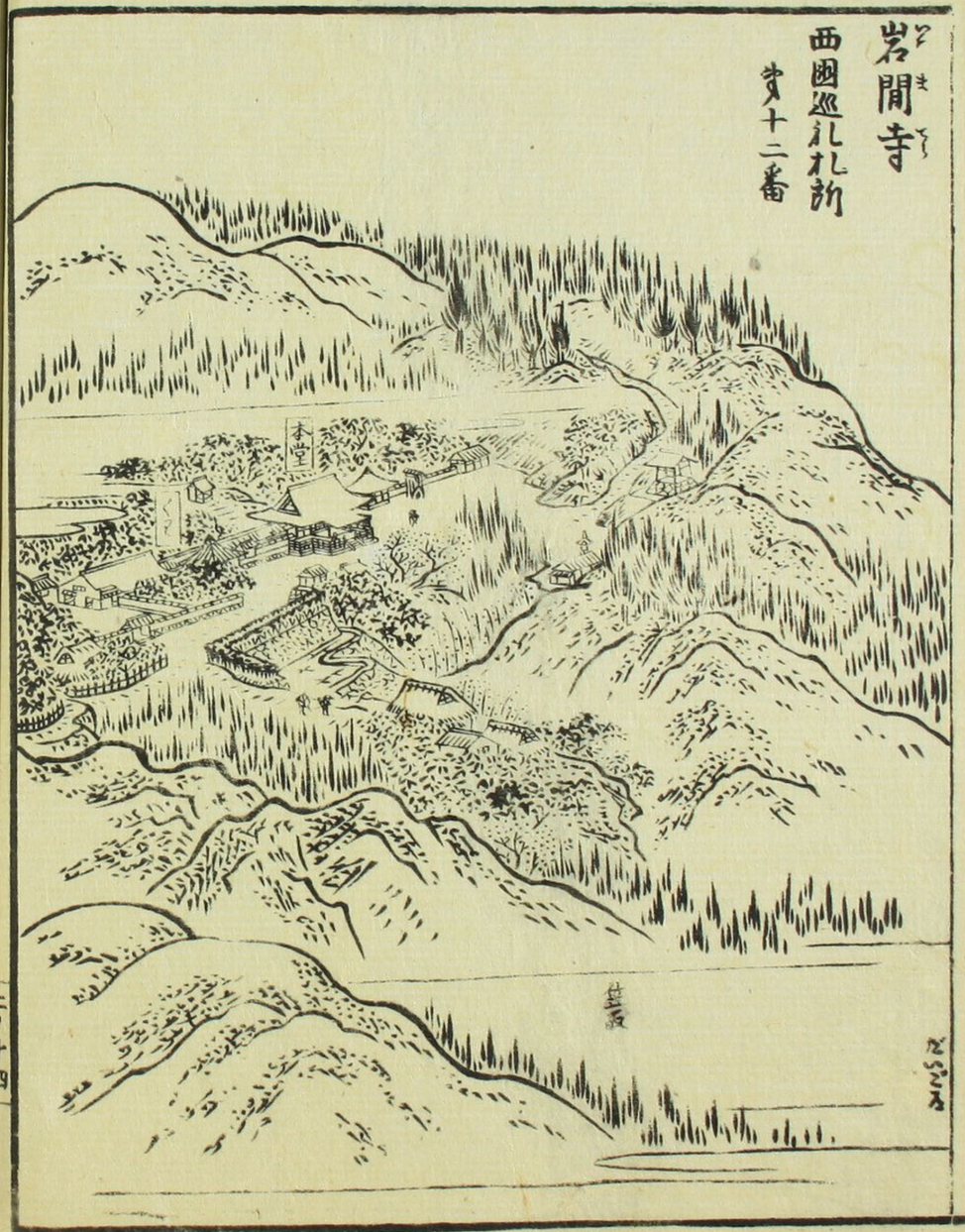
國分山
芭蕉翁
幻住庵
古蹟

やもかくと
あらてや
雪の
柏庵
そそろ

岩間

國分村

岩間寺
西國巡礼札所
第十二番



幻住菴奮蹟　神師芭蕉翁幽棲の蹟之　勢田橋より石山寺に至る中途
傳石あり　勢田の橋を渡る是より八町半餘之國ゟとしるす
經塚　旧跡の傳ふあり　八幡宮のお殿の辛より松原の
少々くの清水　經塚より十歩許東にあり　幻住菴記
幻住菴記略云
石山の奥岩間のしめじ
ふもとに細き流をわたりて
神体ハ弥陀の像と
塵と同じ
ある僧ふ住捨し草の
ぬ
南薫峠
る根
ふもと
士
古人を
くはふ
の棚
除住が
堂山ふ
高く

蕪翁おくれ三とせの業月を屈く長明の方丈記を效く幻住庵の記なり
素九一夏九旬を入一石ふ一字なし深き法華二十八品を書寫し一里の四うぐひを
あみ給ふく禄を乞ひ糟菓をたてまつりぬ人ゝ糟菓をたてまつりぬ人ゝ
今おろ〳〵あゝ山純石土中より出るこゝ其記文の末ゝ

　　芝ゑのむ椎のまもあり　翠沐立

ふ一句を遺し〳〵閑素幽棲の風流ゝ著し〳〵生涯名利を棄て月雪ふ載れ
ゐ記中の社ゝ辺隆尾八幡宮とゝく國分村の生土神ゝ聖武帝の御時營ひ
し國分寺ゝ慶〳〵く本尊薬師佛ゝ村中の道場ゝあり又別保の薬師もゝ
少〳〵くの宋ゝ汲ゝをすゝもゝ多た復缶ゝあり〳〵椎のまゝ伯夷ゝ廉ゝ換〳〵り媒ゝ
脂ゝの城橋ゝ労ゝのそ〳〵さゞがら嶽ゝ幻住庵ゝり東の方谷上ふのほぐたゝ
千丈ゝ山嶽としふゝ岬の方ゝ〳〵く山ゝりの高山ゝ千丈南千丈の二峯ありて
後腰ゝ千丈ゝ嶽より一里南ゝ〳〵く芳田川ゝりゝ西ゝ〳〵れど深ゝもゝ
そ〳〵と流れん笠取山ゝ石ふと碇潮の中ゝありされど宇治ふの蒼嶽ゝ嶽

太神山不動寺

本尊不動明王　智證大師の作也　瑞ゝ〳〵く三井ゝり大師ゝに到ゝを久〳〵ゝ不動尊の
金躰ゝ八ツ峯ゝあり〳〵く八の谷ゝ八ツ大龍王ゝ棲ゝ〳〵く一の老龍
忽然ゝ〳〵く現ゝれ〳〵く山嶺ゝを待ゝ半久〳〵ゝ〳〵く玉櫛ゝありしをめく
不動尊ゝ彫刻ゝ〳〵ふ安置せ給ひ　清和帝乃行宇
神明太神ゝと云給ふく〳〵く久〳〵ゝ大師ゝ〳〵く二年ゝり大師ゝに到ゝを久〳〵ゝ不動尊の
〳〵く田上不動ゝと称ゝ〳〵く一の老龍
又垂跡正月八日ゝ廿二日ゝり七ゝ日の間ゝ〳〵く逗留給ふ人〳〵参詣ゝ多〳〵

田上川

芳田ゝり谷上山ゝ〳〵く芳田川ゝ流ゝ〳〵く
田上里ゝ古跡多〳〵後頼ゐの山居ゝあり〳〵く耕

　　月の田上川ふ清れゐゝあ〳〵
　　田上ゝくゝゝ仿ゝ

旅寝ゝる芦ゝ屋ゝの寒ゝれゐ爪木ゝうゝむ舟ゝそくゝゝあゝと

　　うゝゝ火ゝの光ゝもうゝく成ふゝり田上川ゝゐけゐのゝ〳〵そら

　　よゝ代ゝゝ〳〵行〳〵ゝ後ゝる旅ゝ人ゝ田上ゝ泊ゐゝ多ゝ帰ゝ

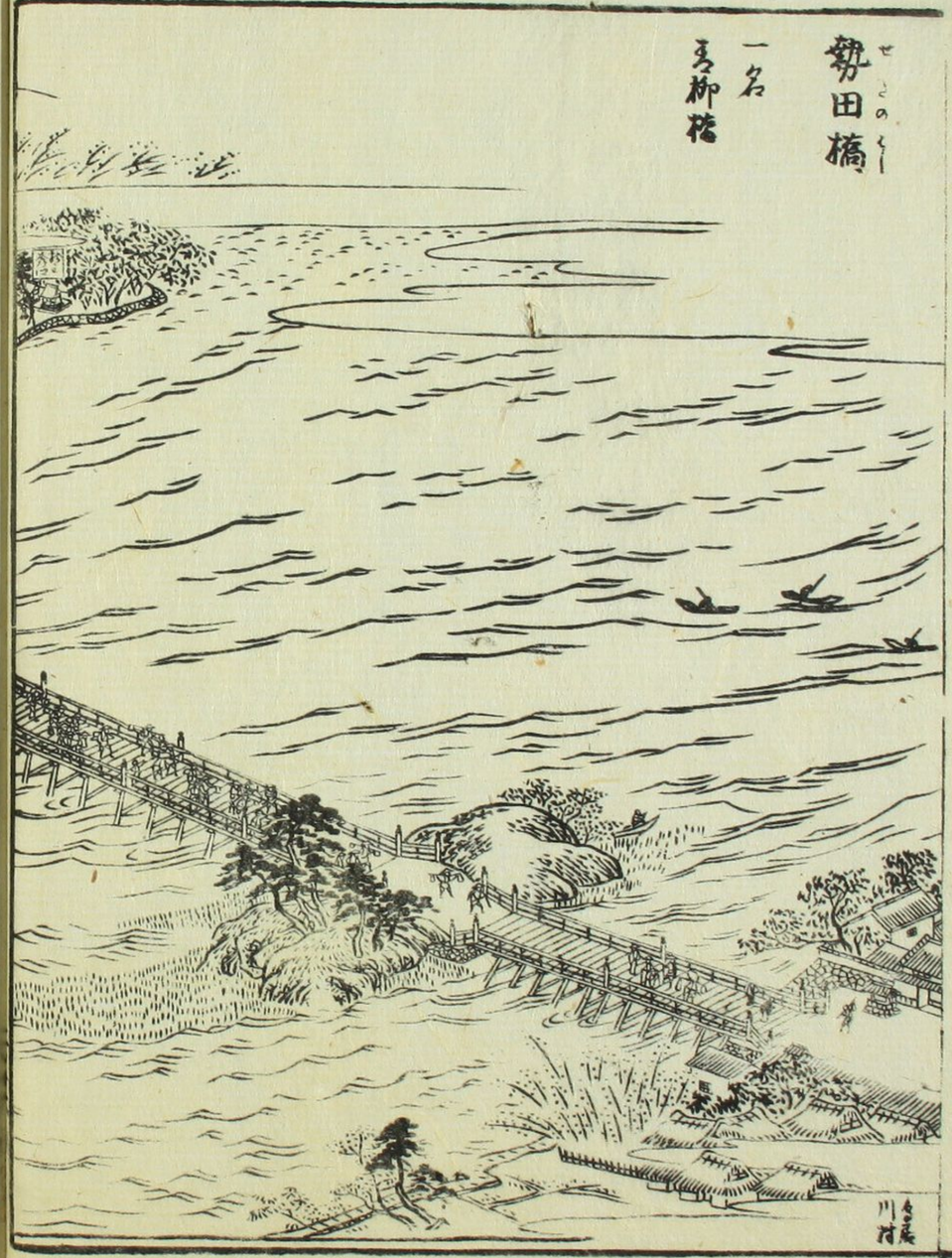


勢田橋

（せとのはし）

一名

唐橋



秀郷到龍宮城

勢田橋

志賀郡栗太郡の堺に小橋長サ二十三間大橋長サ九十六間中洲あり
高綱葱賓瑠璃館ハ遊覧無尽の地勢田の字治山嵜三代實録曰貞観十一年十二月四日勢田橋焼亡云々朝大橋を
一名吉祥の橋和歌ニハ勢田の長橋或ハ瀬田の橋ともよめり
新古今 真木の板も苔生そうり成ぬ久り我世重ぬるまでの月日
新後撰 湖のうみや霞てくらき春の日も海ちも遠し勢田の長橋
風雅 沖相橋波ぢをそるゝあしの小舟さゝやうち出くれ白妙の雪ふりつゝく勢田の長橋
参給
支木 名朗書ふミ上のふみくさ旁立つくるせきの長橋 長雅

柿ハ橋ハ帝城の要衝なり古来殿擾の時引事ハ必ず此橋を焼落し治暦元徳の戦ひ建久元弘応仁の記みるべし此橋ハ代々黒漆の欄干ありしが慶長年中小賀左近将監一吉の時改造せしとぞ
洪波川 洪れ流る勢田の橋の長き心を人ハ知らじな 藤原重盛
時勢田判官 時ハ今雨も降なん五月雨に勢田の橋の水まさりせば 源三位頼政
治承 治むる天文永禄の乱乃ち太閤記ニ勢田採銅所と見へたり此辺銅を鋳し処なるべし
信長公の時甲賀武士山岡対馬守同美作守秀武の一族勢田の小篠原ニ住明智光秀ハ秀武の縁を以て其の代ハ浦ニ属せり
秀吉その代小浦ニ属せり
唐人橋紙漏の時外国より来朝の使節ハ必ず此橋上を過ぬれバ名づくと云
廣輿記 勢田夕照 沙鳥風帆帯タ陽人影與橋長
勢田八曝 細ラ東山ノ月一色江天両景光

秀郷祠

勢田橋東爪にあり俵藤太秀郷の霊を祀る俵氏ハ藤原房前の孫魚名の後裔なり六代の孫村雄のとき大和国田原の朱雀院の朝平親王将門謀叛の時征東大将軍に任ぜられ已に延喜八年勢田の橋上を過るに龍ありて路を横ふ秀郷勢田橋ハ過るも龍ハ過ず秀郷乃ち其勇威を感じ忽然として鏑矢を以て龍の左眼を射る龍ハ痛みを忍び然ども秀郷を湖中龍宮城へ入れ種々の珍宝を贈る秀郷ハ三年を経て帰郷の時龍神ハ又秀郷を


本堂


田上不動寺
谷
後頼卿古蹟

湖水 和名の名前湖記ふ七十餘所あるも古歌多し

風波る事の水海を晴く月かけ清し　沖津奈ミ立　基俊

きく波や事庄照の曇れめれ夜浦を出むくうら松も見　石成

事庄の海や汀のふる雪ふ　道山

少庄の海や霧てと絵さ釣舟ふ　左京大夫顕輔

月新もふみてる浦の秋ふれ汐やくめまれ雁ふ事ふ　源吾

湖の海や月の光れりくい波の花ふも秋ふみえくり　左京

雲の沿湘の波や花ふ事ふ　後京極

湖水の一名湖の海或ハ淡海大宮ふちくに近江とひえハ琵琶湖といふこれハ形ふりく駢ふへ東西十里南北二十里堅田ふり勢田ふ至ッくせ海く琵琶の鹿首ふ似ふり勢田ふ宇治ふ至ッくいよく細々くしい海花尾ふたくふり柱ふ竹生島あり都ふ山谷の滴ふ八百八川勢田の下流ふ供御瀬黒津南郷と唐く巌石高く鐸ふ両岸の樋ふを鹿発とひ向沿濃り落ふ前と宋濯とのくふあるふ似ふく宇治ふ至ふ淀川ふ入雅波ふり大洋ふ會次湖水の名産ふ中ふ鯉鮒江鮭鱒鮎勢田纓堅田鍛氷奥ハ内腸式ふ生ふく供御と成真外給水往還親泥亀ふ似救ふくあり山湖水ふ関ひへむり茶霊五年一夜ふ地裂く湖と成同時ふ富士山現ぜられハ不二禅定をるふ近江人ふ先達ふ勤しむ善積一部ハ已ふ湖とありく今いふしく古来り読ふ父ふし日本紀古事記ふも久くふを懲ふ似ふ懲ふく治流の水深ハ細くしく山谷の中ふり落る家語ふ孔子路ふ謂ふく白支江ハ岷山ふ発ふく觴ふ似盈むほとばしりふ似勢田川ふ入ふ琵琶湖ふ至ふて水源渺々ふく古来永朝ふりみと称ぞりのハ似琵琶湖ふして三国ふ又ふくひろし

建部神社 勢田ふあり延喜式ふ名神大社国ふ一宮と称ふ

祭神大己貴命　相殿姫宮ふ二代貴族曰

月輪池 月輪勢田ふあり大亀川ふ東ふ池二つあり

元の方ふ池の中ふ矢大納言ふ二代貴族曰

野洛
毛川古跡





六玉川の中
聖徳の玉川

新拾遺
こぶ藤の
もりの
萩が
松ふく
月も
色なる
聖徳の
玉川

左宰相中将
仲光



法橋中和



陰千首
武蔵野は
迎江萩
石の
山こ吹か
紀毒
はの
卯花

絵巻

聖路玉川　聖路の里西の方にあり遥の後ろ長サ武町半許の流あり玉川の古名とも云ふ　千載

明るも尚聖路の玉川萩越えて色ある波小男鹿ぞとよむ　後撰　紀貫之

聖路篠原　土人所称なり　古今和歌の名所　玉葉

おしなべて古今ふ秋めれくりさたをさき聖路の篠原　後京極良経

叡山　叡山の聖路の志のそうち焼くさた都を爰うたもんた　式子内親王

むしろ法体頼朝卿伊豆國桂小路を出し時佐々木四郎高綱と上洛の時佐々木四郎高綱の発足しくるが此歌の意

ありし思ふと詠めつれんざあるあら馬なりく足と痛めつれんざあるあら馬なりく足もつれんう聖洲川のむひちぐ真馬

をれがしい都のりのみくちさ初旅あれを足もつれんう聖洲川のむひちぐ真馬

むしてんやとのべ馬立ちくちらべのめ川向ひまそがーアだーりをいうりゆで

あうさ也又と約束し馬をしてだうる程んとやふ馬駆りめさし嘯しく

そひりとだもくとってうる馬立大仏殿と遊行寺の辺とおくありうさもやとうくうる馬立人

高綱鞭をおく遊行を出し駆々なれば馬立人

嘆叫んぐ遅かんな佐々木四郎高綱ぞ聞

あり立く馬立殿ふ馬四人うんとくく立高綱

あうかーこの鞍ひよ猪利と得くく遊ふ頼朝卿上洛の時佐々木四郎高綱

まる程ふ迫ふ國を出くく申うり此てのの馬立人

他若しくて寺と立くく懇ふ添を示ひ聞く

矢橋　岩田より十里あり大津松本より一里の渡口也　岩田渉軍神の時此渡口を渡河めうし事見えたり

矢橋帰帆　釣一竿千一熟白頭翁辛一苦客船西一又一東

幾度風一帆帰去後呂一公榮一達一一孟一中　相國寺林長老

真帆引く矢橋の浦も浮海八景の其一つなりく眺望斜めうふ今おふ浦も浮海八景の其一つなりく眺望斜めうふ今おふ

戸津坂本の人家志賀浦屋葺の松おふ出ふ

残雪かくくつうくく風流の猪地と

鞭崎八幡宮　矢橋あり此地の生土神あり　例祭四月初卯日神主紀氏護持

祭神應神天皇　左神功皇后　右武内大臣　社傳云

元年十月二日右大将頼朝卿上洛の時此社傳云天武天皇白鳳四年二月十一日大中臣

神社いろふと称ふ浦人答くくあんそ浅磨　勅命奉くくる動作に其後建久

有く再祥しくふ故ふ鞭崎の号あり

しく社檀再興の事并社領紫ふ又くうる

攝社　神明社　山王祠　蛭子祠　満宮　子守勝ふ神

社頭ふ古跡あり　除難井　安堵松　斎殿　土人敬ふ

石津寺　矢橋の渡口より西へ行ふ事半里あり

湖耀山と称ふ

本尊薬師佛　初の本尊傳教大師比叡山ふ於くく根本中堂を建立

のとき試とくく一駅あり後世流転年中江府東叡山中堂を建営の時此寺尊仏

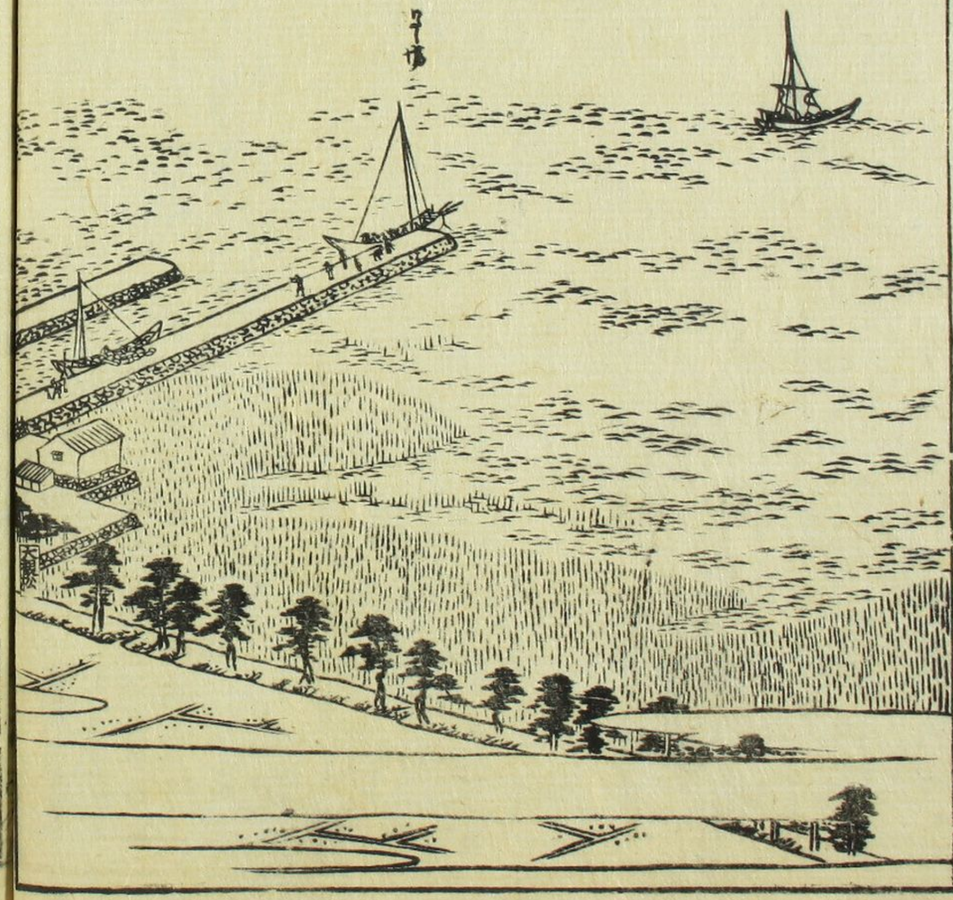
一駅ふ公命ありく上野に遷ふ之初ふ延暦まを系劍の時天慶を経歴

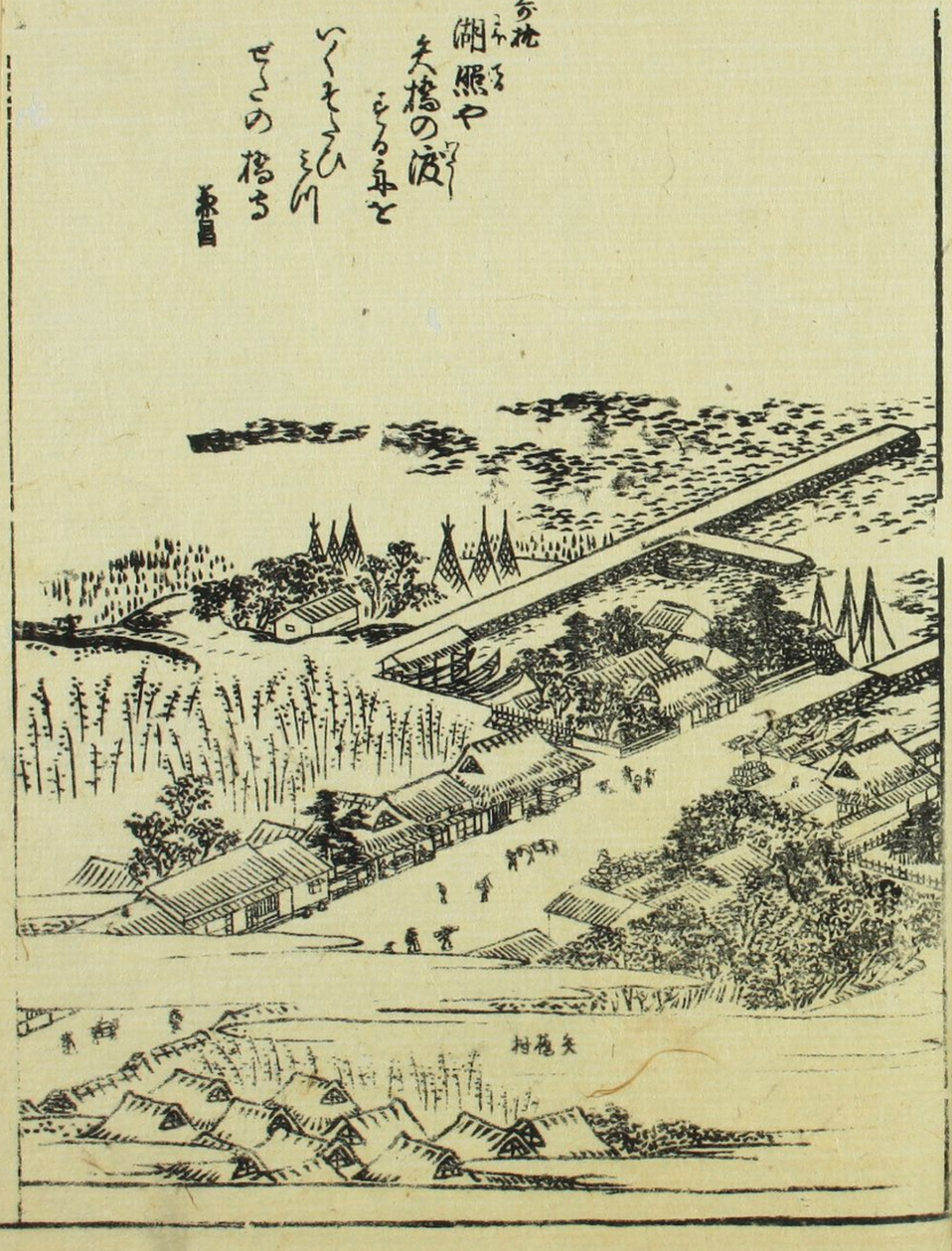
投落ふ其石此所ふ止ふ

ふりて石津寺と号ふ

矢橋渡口場

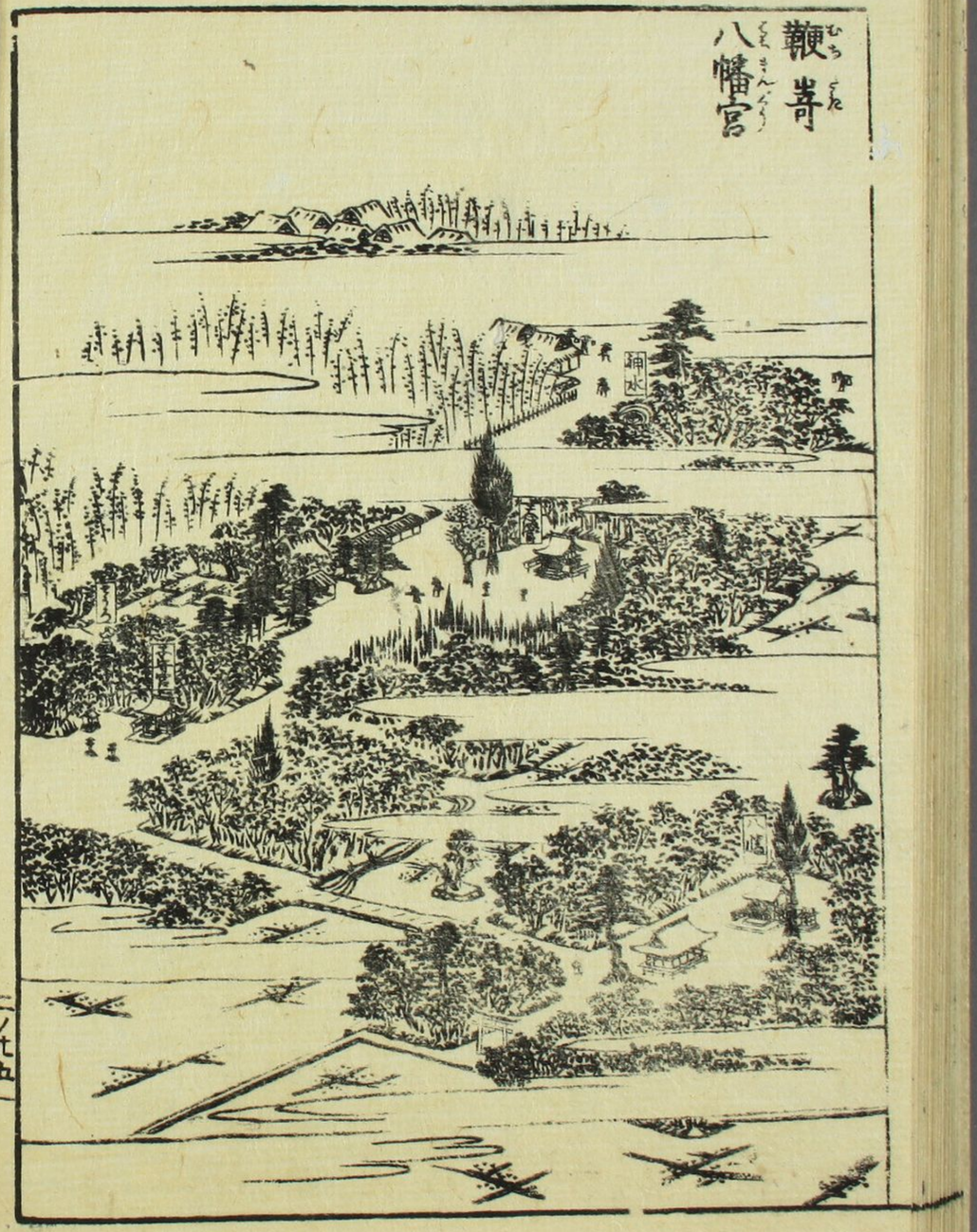
主水
はく波や
矢橋の舟も
出ぬ夢ふ
のるとつれ〳〵と
いそく〳〵人
公朝





秀枕
湖水や
矢橋の渡
もる舟を
いくそたひ
せきの橋ち
秀昌

鞭嵜
八幡宮



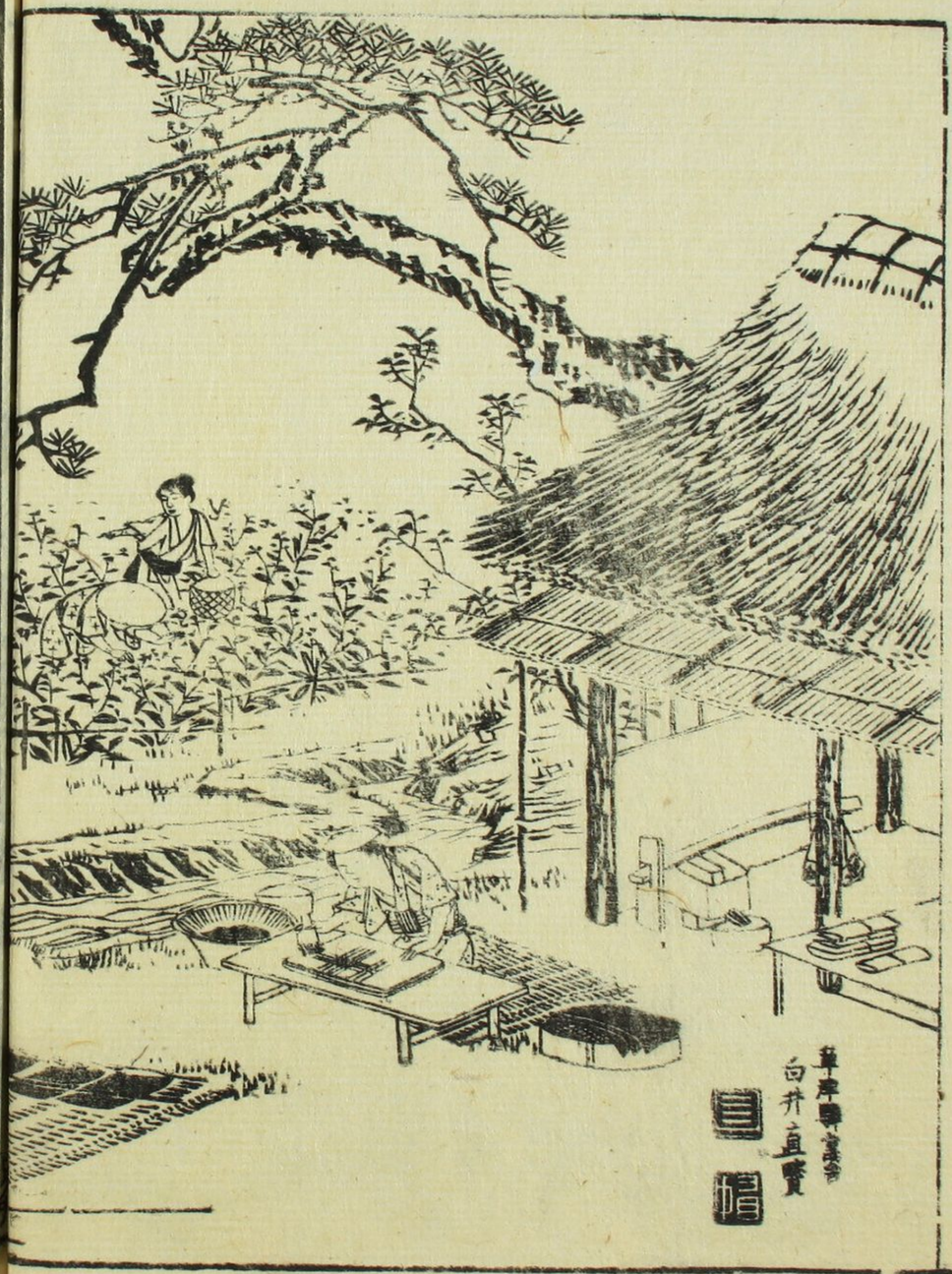
石亭 栗太郡山田村にあり 沢潟より北四町許 湖水の
中にあり 三十間許 山田渡口の村中より来 門小艇にて
和漢の名石名木好んで年来諸国より聚めおかれ
数百の珍禽風流ふしぎ 庭に松樹を樹いて先ある書院ふ石燈ろう外
雑花名木をそ 庵上より遥ふ見つゝさば 湖水漫茫として日枝の
の松真野堅田志賀の都ぢ 沖ふ山田夫婦のつり舟 汀々そうそう
みる山亭をとてなかなかある石ふ神代の勾玉 我国諸州の産人の国ぢ
産ある石化石大物の瓦水入の紫水晶中そである 屋ふ簡つゝ入小筥ふ入て餉とあく
塗籠ふ家蔵をる事都て二千餘石
石ふ外学徳ふ離石ふ至る 月ふ日ふ朝ふ夕ふ
好事の紫貴となく 猿ふ鶴ふ
予も巡行の席に立寄て石ふ観る人の真ふ入必





山田石亭翁
今の名石名品ありて
お石怪石数多く有
都て二千余種のうち
多く真の二ツ三ツ位
そろのみこそ海内の名石亭の
あるようにて四五百
観これ名称ース他
邦ようも持来ろと
ほぬ諸そろ名ー
みとん左傳
師曠が石能言
くふは石亭の









步倦驛亭遐
茲休賣餅家
出門還跨馬
到處敲吟牙

熊谷立閑

琉人泊二草津驛一觀駒井氏之沽人石

中山王

沽人石

一田友汀畫

石郷まで武里半七町、勝中略れの辻あり右へ曲れば東海道なり左へ普請道中仰遣名護屋道へ行

立本明神祠

神人小室氏 別当善賢院 護景玄 祥中春日神廟略

祭神

和州春日明神を同し社傳に云神護景雲二年中春日の神勅に依て此地に移すと

常善寺

日蓮宗中略り成菩提院と號し弊に宗旨初八法相中古真言今浄土宗永禄年中慈恩院と屬改

本尊阿弥陀佛

座像長三尺八寸余脇士観音勢至作厨子の扉ホ四天王の彫物寺記に云神護景雲元年中巨勢金岡の筆なりと厨子の扉に寛平年中略と見えたり

開基良弁僧正

作と云ふ

寺蔵

古文書

仏鉢

石の鉢なり

梵鐘

寛永十七年七月十七日

鐘銘

大日本国武州豊嶋郡江戸庄常善寺鐘銘并序

夫以天下大旱東照大権現祈雨而降甘雨国土豊饒仍為報謝建立梵刹号常善寺矣

本堂

鎮守

神明宮

山王宮

稲荷宮

天神宮

弁才天

地蔵堂

閻魔堂

観音堂

薬師堂

不動堂

庚申堂

大師堂

鐘楼

山門

仁王

境内

墓所

寺領

除地

寺中

末寺

門前

家数

人数

名所

古跡

旧跡

産物

名物

土地の細工

名産

神事

祭礼

開帳

縁日

市

宿

渡

船

橋

川

堀

井

池

沼

塚

碑

古城

古戦場

古屋敷

関所

番所

一里塚

高札場

牢屋

芝居

遊女屋

茶屋

名木

古木

竹林

藪

原

野

山

峠

谷

坂

岩

洞

穴

獄門

磔

火罪

水罪

鋸

引廻し

入墨

闕所

追放

所払

江戸十里四方

江戸払

江戸より何里

江戸へ何里

江戸へ何日

江戸へ何日路

江戸へ何日程

江戸へ何日道中

江戸へ何日行程

江戸へ何日旅

江戸へ何日

江戸へ何日

江戸へ何日

万代とこゝろみの山ひくくもやその河の水をこゝにわかるゝ　元頼

千載

どうだそもこゝ上の山ひくくもやその河の水をこゝにわかるゝ　元頼

新勅

尚かるこゝ上のこゝろをふかくくせ渡りぬやその川波　後京極摂政

後拾

雲晴るこゝ上の山乃秋風もさくしく波遠くしく出る月かげ　法印権大僧都実快

新後撰

御上神社　こゝ上山の麓に鎮座す延喜式神名帳云野洲郡

祭神伊弉諾尊　古事記曰開化天皇要迂須彦命之御上祝天之御影神之女

若考年中　息長水依比賣生五柱皇子一云　社説云元正天皇

あくふ鎮坐

新後撰

神ゆるみくれ山ふかゆきのうへてそ行るひとたのみなりける　元年中親房卿

第元年中親房卿従四位上延喜式神名帳云野洲郡

化しくをこゝ人の為徳を松名代神社

櫻山　こゝ上山の麓小南藤神社属社

当時廣隆家の領ぜしそあり

さそくる山花咲匂ふ山ひめのくる花盛りてそおりける　匡房

こゝ上ありさそくる山ひめのくる花盛りてそおりける　匡房

恐くは本のやしろ訛あるべん順和名抄栗太郡に栗津郷と書くもの宜

鉤古城　鉤村あり足利将軍義尚こゝに陣を築くと云ふ

上洛の時病を発し此地にて薨ぜしと云ふ

小野寺　小野村にあり石場山と称す

神仏混淆

本尊正観音　長八尺聖徳太子の作と伝ふ

後迎世文和年中僧快尚再興

本名六地蔵村にあり文和中散の業庵と称す

紀行

梅木　是齊を本家とす

さくさくへちりぬる漫の春風の源をたづねたる梅の木かな　是齊

あくたえ和の比梅の木あり〳〵其木莖みく和中散を製し旅人に賣しより

せさんしいふ其初八織田氏に賣ける幸斉卜者をして考へしめ

製法和中散小児某の秘方を授けて

店おろす薬師堂あり本尊もと

武尺許出現ありと云ふ

獨公　石多し

菜を立　吾妻上下の旅客多くこゝに休息す

梅のかり枕

二上山　梅木の東北一里許にあり一名石光山〳〵由緒詳ならず

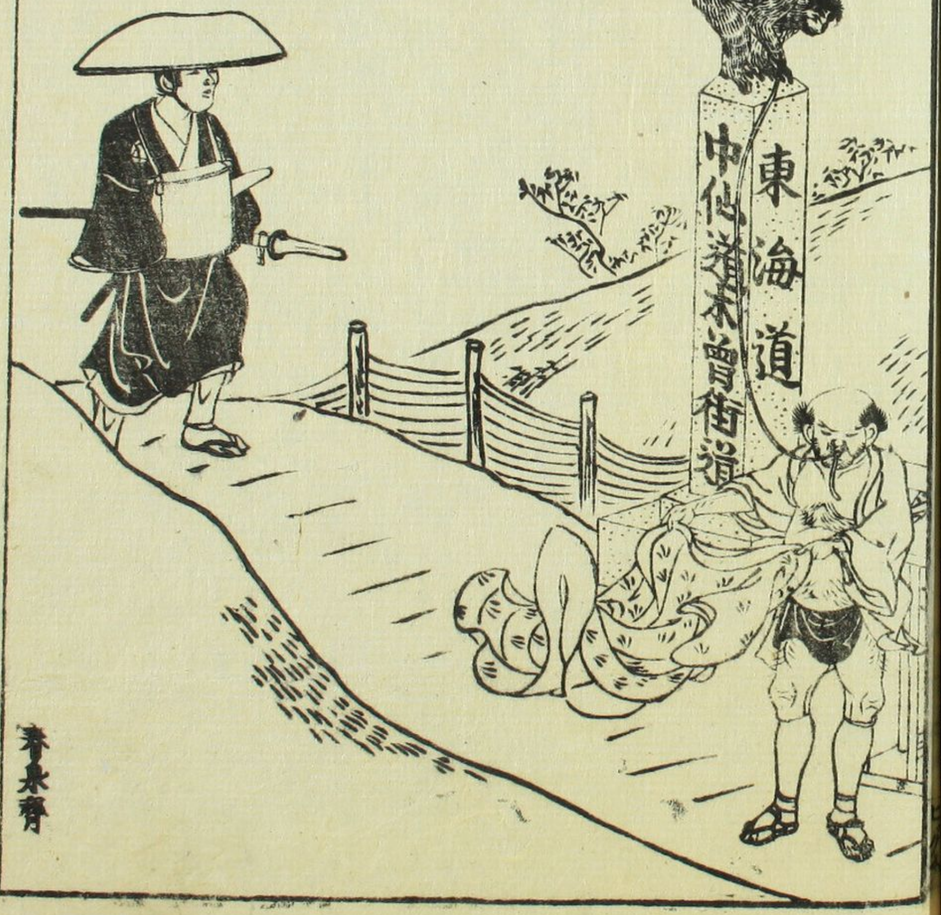
古名比良の峯にて北比良の山ともいふ

ちる紛ふ二上の山ひさかたのあまつ乙女の羽袖をや

茶津追分



茶津
右
曲ゞべ
東海道
直ぐ
岐岨路ヘ
名護屋
中仙



春水齋

新善光寺

高井郷林村あり
浄土宗鎮西派

本尊三尊弥陀佛　長さ一尺八寸二菩薩を具す
信州善光寺と同定といへ共
詳ならず
信州善光寺は四十八ヶ度迄しあり
此寺は小松寺門尉宗定といへる人
往生なつるゆゑ頼ひ信州善光寺
本尊の三尊仲現し右のまふ
袂の袈裟を授け
導給ふ其の時たゞ刀釵のみ
残りぬ是即身の往生と
も同じと見えたり
一宇を建く新善光寺
と名づけたり

石部

近江

石部鹿鹽上神社　駅中町南側に鎮坐
古老の伝上道八十年お開ノ前ノ下道ハむかし
傾城世記に延喜式内と
生土神と
例祭四月上己日

金勝寺　金勝村の山頂にあり
良弁僧正の開基と
○開伽水調貢　海年正月十五日
昔ふかくに土人云ふ水
汲でまるゐ水玉走りて
基水と号ふ故ふ

震巌　裏山にあり
聖武帝の御願あり
二王門
禁制の札あり
過て
次故ふ
落の里
水

川

川ゟ村の名
あれど今ハ名
の菜飯田楽
豆腐ハ名
物ひて
川の店
豆腐百珠の一枚
金盛あり



梅木

謡の名れ梅木(ひのき)
氏此事(このこと)
字の名此事(このこと)を
学ぶ名(べく)もあるへ
ふ勧学(かんがく)を要(よう)す
小田原(おだわら)の外(ほか)乃
たこびき(蛸引)

金華山震巖

金腸峯の
巖岩に數十人の
ちから及ばざる
動せども
動くまじき
催ふれ頻とうごく
押せども怒ども
動くあり



春泉寫

揮塵錄小曰
宋の政和年中
壺壁縣より
一巨石を貢ぐ
高二丈余千斤
ありけり數人のこれ
を物ようろうく
表幣をべく故
題して慶雲萬龍と
号して金帶をのって
真上に祖て動そ
奥刻かして其中ふ
至るまでの
比せん



阿弥陀寺　金勝村にあり。金勝山と號す。野洲郡土室村より登ること二十八町。七谷といふ。幽谷閑寂の地なり。

本尊阿弥陀佛　文明十八年宗恵上人の建立足利義尚公の御願と聞えて後土御門院へ奏し勅願と勝しと。天正九年の兵乱に焼亡す。

西寺　甲賀郡西寺村にあり。石部より十町南の方。阿星山常楽寺と号す。坊舎の古礎多し。

本尊如意輪観音　櫻門金剛力士安慶の作。

東寺　同郡東寺村にあり。阿星山長寿寺と号す。坊舎の古礎多し。

本尊地蔵尊　行基菩薩の作。

傍に石仏多し。

原　武井信樂宮の古蹟。

谷水宮城の古蹟あり。高サ七尺八尺五輪の形を掘り出す。

大石塔　堂あり。聖武天皇の御骨を收む。

鬼灯　正月十五日おこなひ。

潔斎して赤魅黒魅の面を被て鬼の舞をなす。式あり。

辻堂　古碑あり。

勧請縄　江州檜物庄を専附

辺縁　群集する事多し。

櫻櫻　堂あり。右大将頼朝より寄附の古跡あり。

新六地蔵　一年中数百人

美松　神祠あり。

行道筋に松樹山中に多し。又松尾明神祠あり。

山城松尾の神をまつる。

美松と駢をなす。

松の葉細く艶あり。

大樹の根より四五本ずつ株常の雄松のやうにそばより枝を数十ふさ垂れ近く視るべき蓋のやうに遠く眺めば側物の如し。

霊威凌の霊樹なり。

異中に雌雄あり。

雌松株に雄松其雌雄分明あり。

緑葉にて同姓生じ枝中深く悪同なく隣山の方の松より美松一株もなし。

又他所へ移し植ゑるに枯ること稀なり。

古枝を守りて遠近より来て初て観る人賞嘆せざる事なし。

霊見村の名もこれより出たり。

仕うけ人形を作りて四時ともに旅人の心を慰む。

日雲霊蹟　二雲村の神祠なり。

祭礼四年一度。

二雲村の南妙感寺に安置す。

妙感寺　二雲村の南にあり。

万里小路中納言藤房卿出家の後中興仙峯寺頂に庵室を結ぶ。

本尊千手観音　長七寸。

仏師定朝の作。

後醍醐天皇より名香を賜ふ。

万里小路藤房卿終焉地　当寺古墳あり。

太平記及び吉野拾遺ふるくより老僧山へ入帝より勅諚一人悪の僧六年尊
[illegible]

横田川

横田川　田川村の東にあり横田川村の畧誌に詳なり万里小路家より使者あり一見
まい野郷川といひく側水を入
川岩路傍にあり相傳ふ慶
二人の童来都へまる時投
道より山上石歩許にあり相傳ふ傳教大師
梵字石　鐫る
岩根山善水寺　横田川の小岩根山にあり
天台宗
本尊薬師佛　脇士日光月光二神將四天王
傳教大師の
大師堂　俗門にあり　鎮守　六所権現
元三大師を安ず
本堂の像　思川　岩根山の
石傳池　本堂の傍　川といふ
万葉　石傳の岩根の池みなく鴨なくうらさひ
支集　くちなしにそ匂ふ石傳の岩根の池の
旧　あしのさやぐなり石根の池もふるき代の教ふる川波

岩根山

岩根山　山嶺の最高なる十二坊嶺と
北嶺の峯　日枝の峯根本中堂を遠望し峯根の城
飯道寺山　まで限なく見渡す
俗藩　り東北そよそ久しく若き代の岩根の山松の茅松
家集　咲出るいはひの峰の若松のよれとく添人もかし
支集　久しさの若き盛りら甚もろ
寺記云　ぜん當山　元明帝の勅願ありて和銅寺と號し歴次歴后延暦中傳教大師
北嶺山根本中堂を営み時山の良材を伐て横田川に筏して叡嶽に達
せんとせ其年旱魃して河水かれ
出さる其業を良業金留の四文字あり大師霊山にて其傳法灌頂業滞
八歩の業障佛と得うさま二仏等尊ともて修行の法を修し此水満さとく
良れみ坂を当麻浦みに着せり大師ち
金像の体中に蔵む白鎮の守護ありく醍醐王善道の毛垂水あれとそ善水ちくと歩うり

平松山更松





水口（江）

土山まで武里半十一町　縣内

孫小金谷をうつりて茶人結路利休の好にて作せるとぞ　大岡山水口神社　舘町裏町十五町　縣内

山號を長東大嶽と稱す　神祿若干　社僧若干

縣内西の方にあり　延喜式出雲下の生江神社次

例祭四月上申日　祭神日吉山王大宮

美濃郡（大滿宮）

縣内にあり　社僧云々　其一方秀京に在り　又湖水を渡り東國に多し

蓮華寺

縣中南の方にあり　宗旨天正年中の田光恵上人に歸依し　今宗とあり

本尊阿弥陀佛　長二尺五寸　坐像

大岡寺

天台宗龍王山と号す

本尊十一面觀音　長二尺八寸　立像

寺説云　天武天皇白鳳年中の建立　行基菩薩の作　開山は甲賀三郎兼家の子　本尊と同作　山神之れを勧請す　其後久しく荒廃す　元禄年中再興

長明海道

長明海道記に「夜ふけて安に霊水を汲とりて水口の名をしり　雲跡兆殿主の物見鎮壇或は將軍自筆の歌書を賜ふ　今是を藏す」

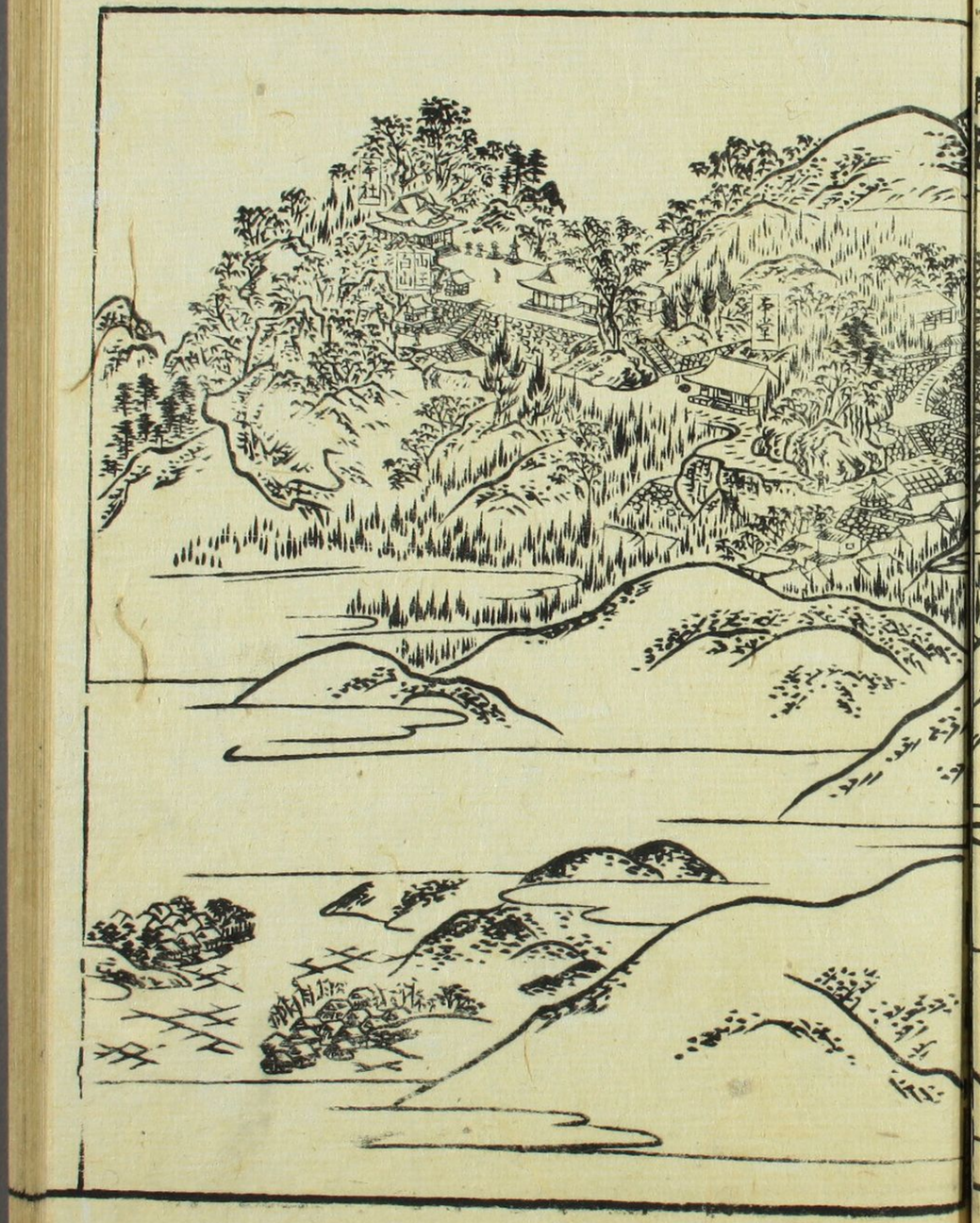
長明の事蹟

○按ずるに長明の事跡もっとも詳ならず　今其疑ふ所を擧て左に記す

將軍實朝公に謁せしは建暦二年とあり　東鑑に建暦元年鎌倉を下向し　翌年二月二十九日鶴岡の社參ありしに　長明の事跡と符合す　然るに此海道記の文章の風調と方丈記と其趣を異にす　疑ふらくは後人の作にして長明の作にあらざるか

近江甲可郡一尋得義綱に於て大岡寺に出家せしは　

本堂 某師弥陀 釋迦 十二神将 文安 大師堂 元三大師と
弁財天祠 當山金剛院 安次 和州 信貴山城主 松永久秀 織田信長の 其時當山の衆徒加勢して攻 山林の地成 初の 蒲生郡 長者の持 大黒天像 御 堂建立 寺僧に 山王祠 本堂の 白山權現祠 山王の像
嵐王堂 山の守護 末社十八柱 當山勧 本堂の 龍池 本社の下 影向石 本堂の上
護法石 本堂の 龍池 本社の下 閼伽井 閼伽井谷
鐘樓 南谷小白髭明神の祠あり 昔 杖 祠 道の像
足跡石 東向石の像あり 石南峯谷 小石 鷲 住僧 大樹 満 谷
道標石 八角比五の 造立あり 山伏落 本社の 山 所 逆に 峯
拝當山の所願 元明帝和銅七年八月十五日 天童妙相 現して甲賀
郡 聲嶽 峯 雲 護 安 登山 向 熱 聖權現乃
靈告 杉 峯 其告 飯 盛 形 ひ 道の標 峯 社
齊宮乃登山 椰の 飯を盛 形 ひ 道の標 峯 社
向石の側 熱聖 不權現 勧請次故 飯道神社 歸次厥后 聖武帝
信樂宮 遷都 時 王城の鬼門守護 峯 天平十五年 南都
興福寺の安皎法師登山 伽藍 造立 峯 都の靈場 峯
文徳帝の御宇 飯道神社 位官 授 礎 聖寶尊師 徒
當山岩本坊梅本坊和州大峯 隨身供 峯 中興 四月五日
今 至 峯 山日 役 勤 社 例式 定 峯 渡 峯
當山の開基 良辨僧正 安皎 峯 二世相續て 住職 中興 定 大師
悪賢 師の 従 近衛院 安年中 飯道權現の勅額 賜 今 藏 時 甲賀
の惣社 成 織田信長 前領 寄附 峯 古記 久 登山 多年 坊 寄
神領 峯 峰嵓 峯 大峯葛城 峯 峯 峯
空 峯 老杉 聳 苔蘚 蒼 丹 峯 峯 峯




飯道寺

山上庚申　水口より南へ半里ほど山上村あり此村より登ること一十八町許也

一宇あり瑞應山廣徳寺と號す傳教大師の作岩石面に鐫せる延暦年中大師比叡山根本中堂を造立せんとて甲賀谷の一名杣谷といふに入て數木を求む其時あらん人鐫りし甲賀谷より杣川といふあり杣川と云ふは杣木を里小里村の方へ流すゆへ也杣川へ會流

青面金剛童子

辨慶背競石　水口の東へ半里小里村の北の方山にあり

義朝洗首水　稲川の側にあり義宮の峯より流れ來る水清くして冷し義朝公の首を洗ひたりと云ふ

景清力競石　右の石も清水共に右の二石は清水の流れの邊にあり

山口重成碑　碑文苔むして解しがたし

惹安寺　水口村にあり禪宗宇治黄檗山の末寺也

松尾川　水口村の端にあり一名内貝川とも云ふ土山の田村川へ會流

署記

若狭のよこ石より出て北へ流る

土山（迫江）　此の下まで水口より西へ半里十一町半頓て大和國へ入る土山驛は本陣一軒脇本陣一軒家數百餘軒あり

土山や　有ほしも淋し　秋の風

田村明神祠　土山の驛より東へ半里許にあり延喜式に載する所の田村神社へ未詳道の傍にあり一名田村明神又田村祠とも云ふ

桑神　中央將軍田村麿朝臣の方帳峨天皇

神地堂　安に在

神寶　田村將軍像左右に二鬼あり二鬼は捉妖又は緒毅麦神共云ふ玉纂一幅

甲冑弓箭太刀　將軍家より賜る

珍瓏なる名品あり

土山驛本陣田村家に往昔延暦年中奥州安部高丸王命に應ぜず叛逆をくわだてし時將軍此地に下向し給ひ數日逗留ありし時の休泊所なりとて今に其儘に保存せり

玉纂一幅

土山驛脇本陣山中家

神祠　土山の驛より東へ半里許にあり延喜式に載する所の田村將軍像左右に二鬼あり二鬼は捉妖又は緒毅麦神共云ふ玉纂一幅

土山や　有ほしも淋し　秋の風

田村明神祠　土山の驛より東へ半里許にあり延喜式に載する所の田村神社へ未詳道の傍にあり一名田村明神又田村祠とも云ふ

桑神　中央將軍田村麿朝臣の方帳峨天皇

神地堂　安に在

神寶　田村將軍像左右に二鬼あり二鬼は捉妖又は緒毅麦神共云ふ玉纂一幅

甲冑弓箭太刀　將軍家より賜る

珍瓏なる名品あり

土山驛本陣田村家に往昔延暦年中奥州安部高丸王命に應ぜず叛逆をくわだてし時將軍此地に下向し給ひ數日逗留ありし時の休泊所なりとて今に其儘に保存せり

玉纂一幅

土山驛脇本陣山中家

鬼ども従ひこの人古に勝りけり　天智帝の御時逆臣藤原千方が金鬼
風鬼水鬼隠形鬼の四鬼ども随ひ伊賀伊勢の間より起りて王命に背く紀友雄
が謀あり千方と計りて友雄一首の歌を詠じ叛軍へ賜ひ
　茅も木も我大君の国なれば鬼のをちかた
鬼等あれと唫じ感動してみな千方勢を去りて友雄が討ところ
役小角が呪縛して為鬼法鬼を従へ源頼光四天王を連て大江山の鬼神と戦ひ
渡辺綱が羅城門にて鬼の腕を斬平維茂が戸隠山の鬼ども謀たし田村麿が延喜
十六年十月従四位下征夷大将軍に叙し弘仁二年五月大納言右大将に成さく
逆去る年五十四　天子自添園に入ませ唐魏徴が比しと爪牙の臣と吉凶の
山科の南栗栖野ふかき若羽山清水寺を坂上田村堂と称し奉原旧名成高
産ませ給ふもの故ある産明神の宣命あり神威霊験日々ふ著く
春宮の宮居東園西の旅人立寄て拝ませ給ふ故東園西の旅人立寄て拝ませ給ふ故
田村川　和泉国河内境の山中より流れ出る川と云

阪　或説に坂の峻嶮をたのんで山賊強人を暴逆ふるまひ
蕨賊の模りをなすもの坂の字を塔ものと云ふ
猛き家多し

りはん道を頼む四ツ辻の上方を横ぎひらく　実虎

澤村立場の入口ふ辺江伊勢
二州の封示あり

阪路八町　七曲一名
多津加美坂とも

世ふれしふも就くり給鹿山むかしの今た成るあるこん　秋宮士所
そくふふうれた成そそにふり捨くいった成形我身をふこん　西村法眼
　千紅葉いろくふあるそでふ山時雨のいくふれかおるべし　松宮智

所くに変ふ今の関跡もふ関の頽とも
ふる降ふれさえぬれをそふふ山ふ関の戸さし成々且　関文昌

妙り捨くれんふんをそふふ山関やいふ社月も守くり　荒木田文雪

今宵いそうの驛あふ沖津風をそでめる末の下社半にぬれくそて伊藤
の美路行末の嵐ふさそれ暁月の影さえくふのそともみえた　下野




土山
田村明神社

田村将軍
給条の鬼神
退治の事
実記あ〳〵
ざんしん〳〵
久〳〵く世の
人口膾炙
そろる事
これ親孝
の仰力
ゆり

親孝のため
矢さきたゞ
毒と成
酒しゝ
鬼殺し〳〵

親孝

鈴鹿神社　坂下驛中の生土神　例祭二月八日
後淺擦す

近江國神崎郡鈴鹿山の麓に鎮座す延喜式神名帳に載る所なり

鈴鹿川ふるさとびれ神路山榊葉多く出る日こゝ

祭神三座　中央瀬織津姫命　左右ふさ吹戸命　瀬羅津姫命
相殿倭姫命

鈴鹿社　糸神内外太神宮天神地祇　幷而多神と記せり

頓宮屋　神體の右の方
新勅　伊勢國鈴鹿郡の地に頓宮ありしことは倭姫命世紀に見えたり

いそぐともくゝんこゝろ旅枕

羅山子神社考云當社の傳記いむしろ小禪師然る皇子大友軍を催し

隔つる其ころ伊賀國を經てこゝに山に到りぬあに其の意を悟らん公羽と姚めり

皇子走り帰りぬ翁はくゝと見送りぬ君八王位龍顏を拜れ海内を一に

ひとつの始を持々つまれも君小相傚ふ則家愛

有ふく我志そい先帝の皇子淨見原親王之大友の乱を避さまふ到るとき寓人家

救礼し跪く云皇祖　天照大神五十鈴川の上に降ります君小其後裔ゆえしかり

こゝ注ぐ禊ぎ〳〵昂然たる大雨頻りして鈴鹿川の水漲出ぐ

流る事早ふ波時ふ鹿一頭泳ぎ着をうかゞふ人あり

會鹿治とりて此翁等の祖神ぬべし廢后皇子美濃國に入ぬ白鳳元年

東國の兵伐起し大友皇子を滅し天位ふ昇ぬぬ　天武天皇とぞ申ぬ

八十瀬川　一名鈴鹿川　海道の左みかげ又右に流るゝ
新勅　すゞろ初くいくふかゝるねもぐらの八十瀬も七つ瀬も大雨の日

詞花　六月晦の日祓ふ海に鈴鹿川八十瀬の流を立給ふ

玉葉　もぐらの八十瀬の波いつみもせくわてつゝぬ袖のぬるゝに

新後拾　すゞろ川氷やせたと赤めるん八十瀬の流も行やらぬ

曙記　八日大晴卯の時ふうふをゝと立川流の波音ふ

もぐらのもぐる氷もろ〳〵八十瀬うち出る波のゆふ

琴之橋　鈴鹿社ふる町詳ふの方れ石橋を
又関驛中たも同名の橋あり

支本　もぐら山椿の古木れ九本椿ありしかり

琴の緒も切ぬべきふ聞ゆるん

後成

後成

治部卿

前大納言

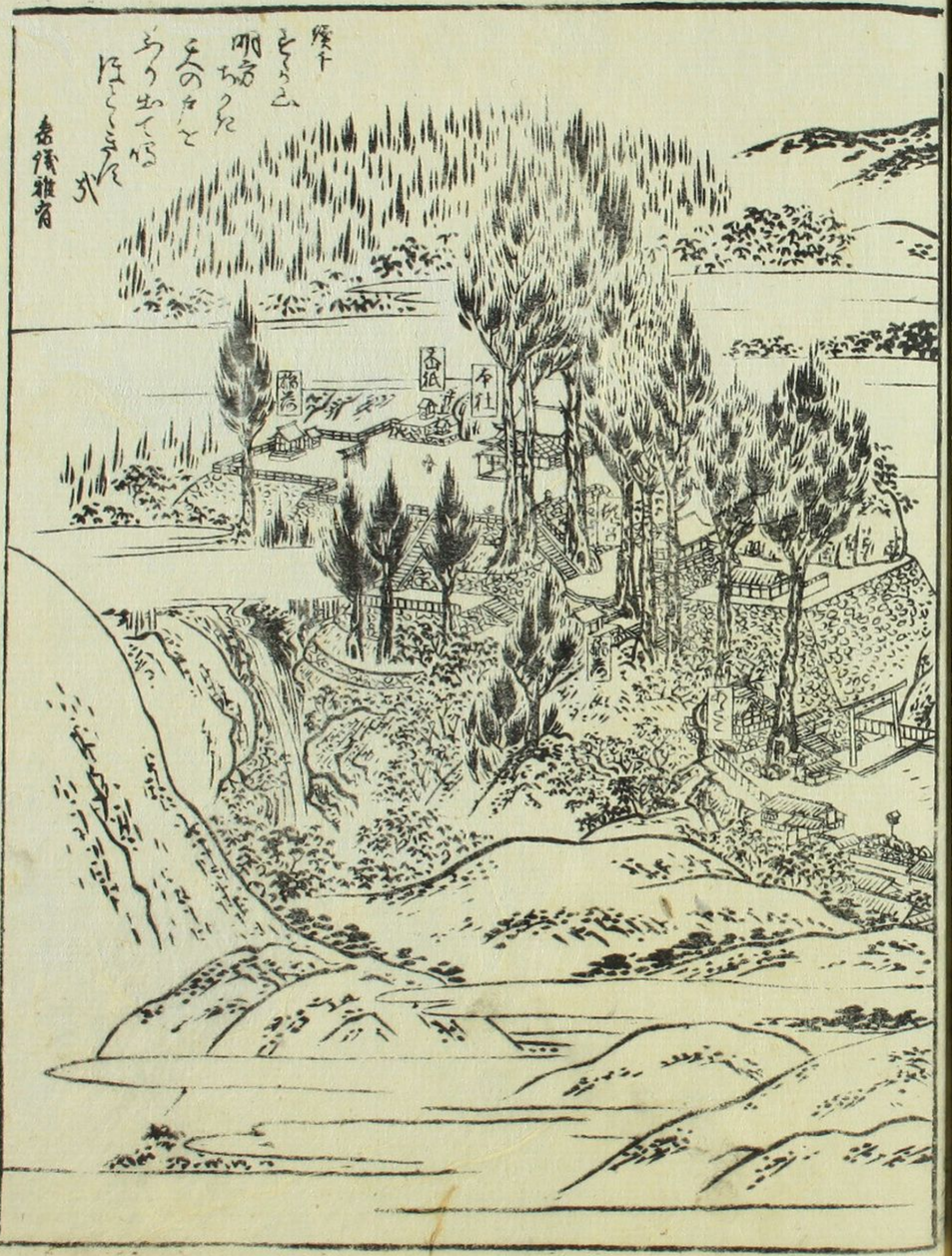
勅撰

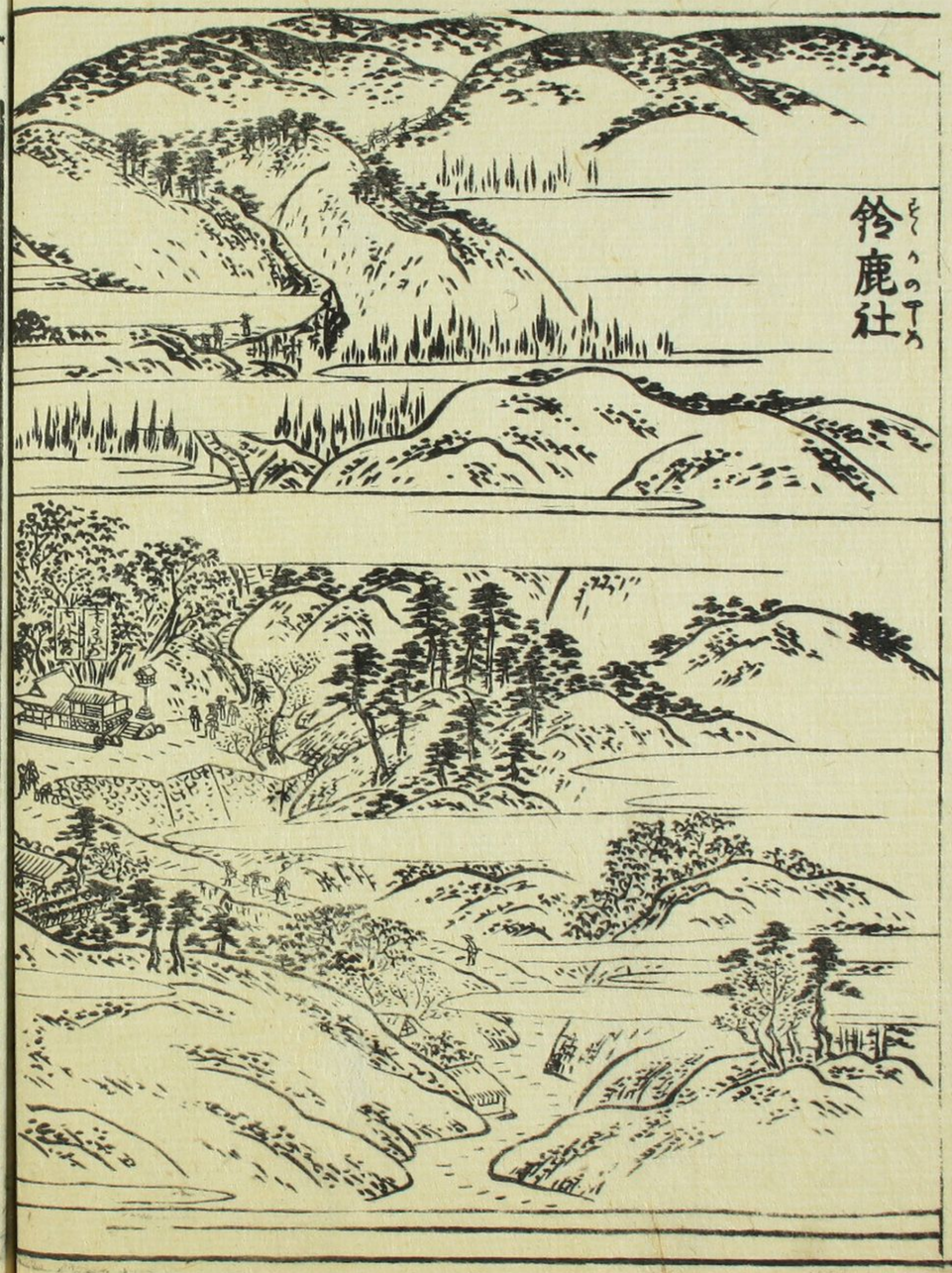
内裏

後拾遺

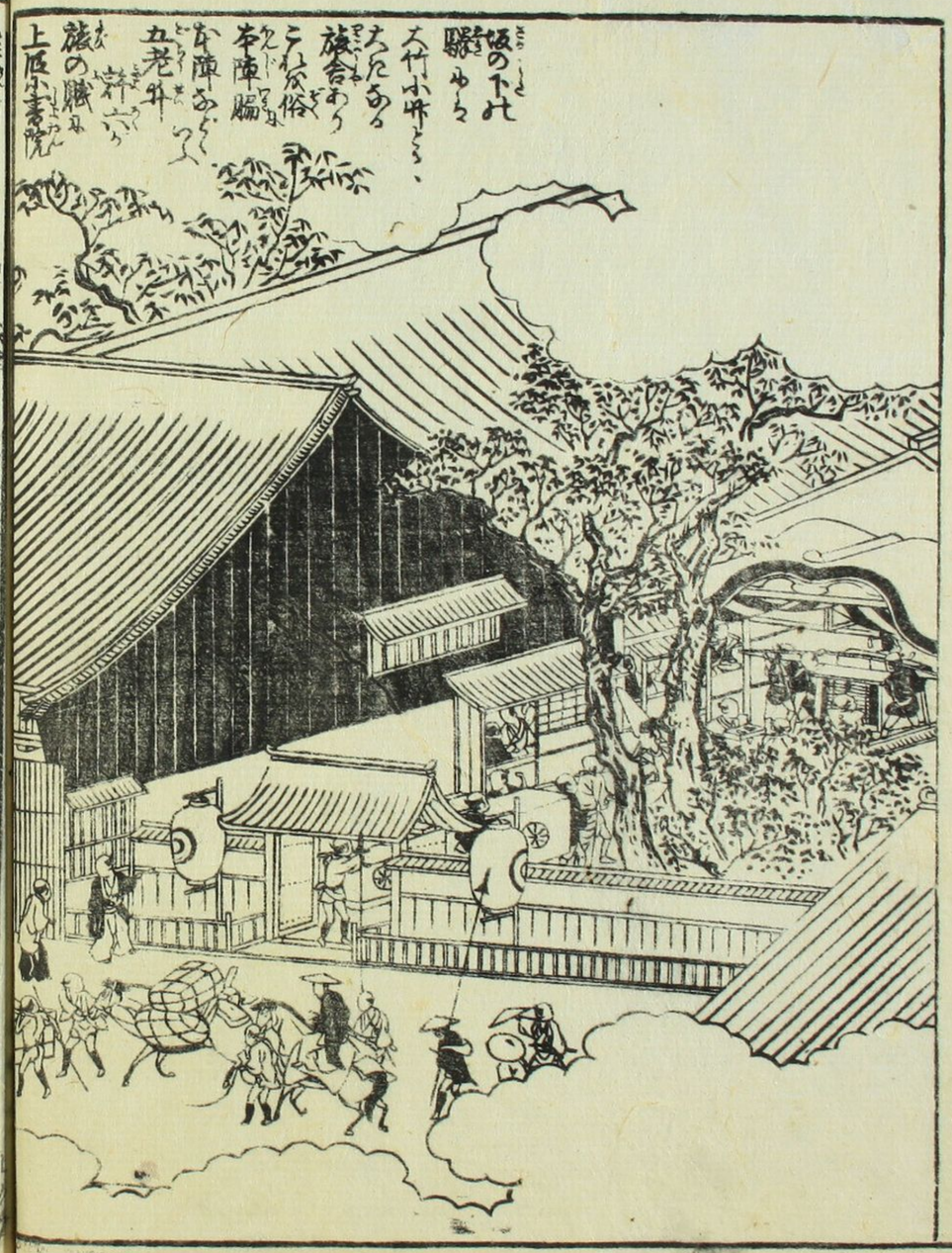
光房

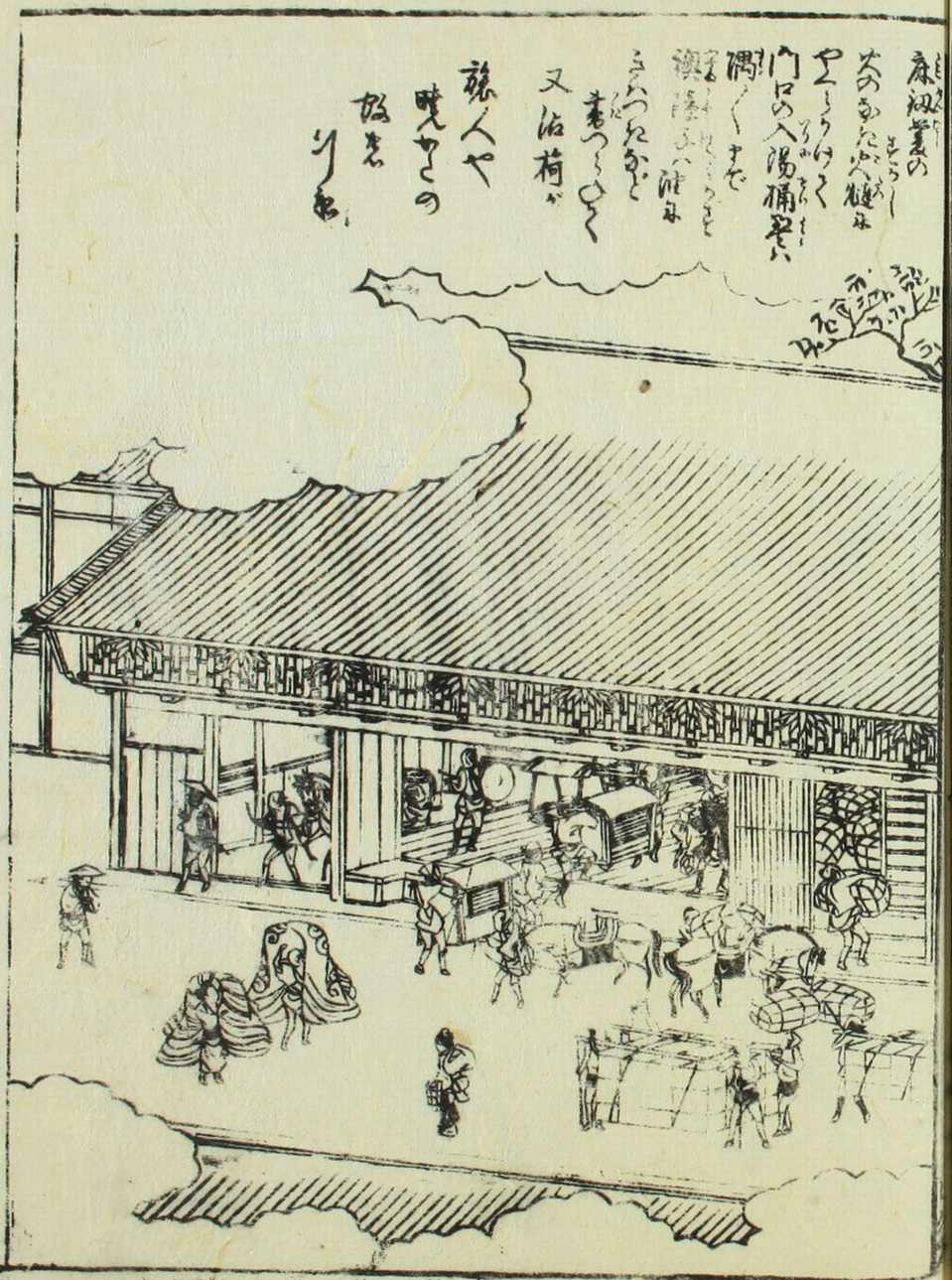
前大納言


香取
本社
鹿島


鈴鹿社

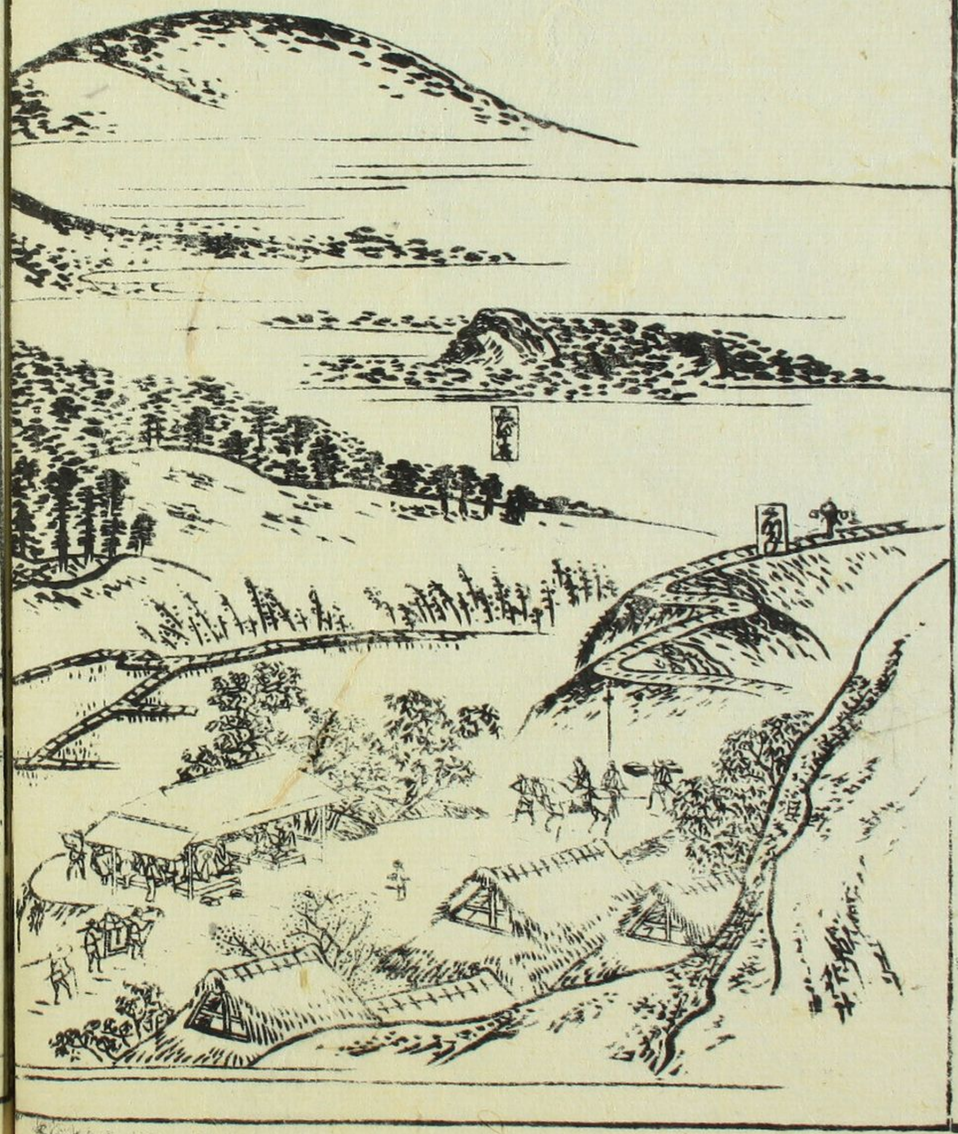
坂の下より
駕籠やら
大竹小竹とう、
大たる
旅舎あり
これ俗俗
本陣脇
本陣あり
五老井
清水
旅の賦
上原小書院





原汲業の
大のあたゝかへ
やとうけく
門口の入湯傭ひへ
洞くまで
湯治ふへ油
まつくろく
又治荷が
旅人や
晴れ
坂き
り

筆捨山





筆捨山

雲景

無法眼

圖を捨ふ

所なく

筆ならず

物の家

坂下（伊勢）

鈴鹿坂下と関とを里半ばかりの駅の入口に古城あり関氏藩屏のころ山頂に関守第の古跡あり又和の街道あり伊賀へ通ずる追分あり（後醍醐天皇笠置城に籠城し給ひし時東国より参向の武士等此山に陣を取り給ひし故事あり）

祥月法師

もろこしもむかひ給ひし閑所とかいにありぬ古つわもの

定家

あれはてゝ人もかよはぬ関ぢとて

右村口

なほ通ひけり

関（伊勢）

亀山へ七里半駅の入口に古城あり関氏藩屏のころ山頂に関守第の古跡あり又和の街道あり伊賀へ通ずる追分あり（後醍醐天皇笠置城に籠城し給ひし時東国より参向の武士等此山に陣を取り給ひし故事あり）

祥月法師

もろこしもむかひ給ひし閑所とかいにありぬ古つわもの

定家

あれはてゝ人もかよはぬ関ぢとて

右村口

なほ通ひけり

庵原（駿河）

宿中民家のお蔵にありしもの街道筋にあり井口氏の家も駿夫にて名酒をもつ人駿夫勝もあり

えぞうのあれやそでうの関あらん

九関山寶蔵寺地蔵院（駿河）

奥縣の中向ふあり

真言宗

本尊地蔵尊

（寺記云）

聖武天皇天平十三年の作海門に瘡流りこそ人民ことごとく苦しむ行基菩薩これを哀れみ給ひ地蔵尊を刻して病悩除滅の加持一七ヶ日及び

貴賤に此蔵の名号を授け給ひ法の印を彫刻して与へ給ひ病患忽ち平癒せしめ

又天長元年の比ほひ應貞僧都といふ人地獄に堕ちて苦しみ多し

と夢に夢ごとの如くに地獄の猛火炎々として青蓮華と現ずる

の罪障悉滅〳〵則一印を授るされ光明真言の正辛〳〵應宣爰賢〳〵感淚
袂の袖ぬ浸にされよう霊告み仕〳〵有縁の衆生に與〳〵今の六道のま判
まれ〳〵延長五年ぬ別当阿闍利宗應に示現ありて曰我閻提救世の悲願
と発〳〵六道教化と感〳〵在悪の衆生ぬ友〳〵故ぬ往来の汗洒に還をく
〳〵そ於是鈴森の関屋の側ぬ堂を営〳〵安置次中ぬ洪水〳〵て山岳を
〳〵時関駅も訴〳〵ぬ改る事那〳〵九ケ度ぬ建〳〵故ぬ九関山の号あり中古ぬ
ぞる像盗賊の為ぬ打方された其ぬの別当職穀を剥〳〵本座ぬ還〳〵めぐ事ぬ
頻ぬ祟る衆ぬ示現ありう〳〵当国白子の浦ぬあり早〳〵還〳〵せ〳〵垂應あり給る
其暁ぬの浦の漁人茶ツ〳〵云辺ぬ海上に於々光明燿々さう真実ぬ慕〳〵く
網ぬ下をぬ地蔵菩ぬ浮さう貴様駆りそち護〳〵事度〳〵還〳〵をぬ垂驗
古人ぬ言〳〵ぬこその人語〳〵て関地蔵ぞと教れ〳〵ぞる
一体尊像の一体和尚ぬ依年久〳〵く馬蹄の塵ぬ埋ぬ
隠ぬ荘厳裏畔〳〵めれ里人集り〳〵く開眼供養をぬ〳〵ぬ
ぬ衆の傍ぬ生ぎう〳〵ぬ猟の殊報をぬ〳〵ぬ修の
ぬ〳〵ぬ高座ぬ昇て発願の証ぬ
〳〵ぬ所の老若男女いのちぬ地蔵経をぬ〳〵く地蔵菩薩絵をぬ〳〵く
ぬ〳〵ぬ脱のべ退浅らし〳〵く落向し〳〵く
ぬ〳〵ぬ田畠ぬ穂に穂さく人浦里の殺生をぬ〳〵く
ぬ〳〵ぬ大敬強盗ありし〳〵ぬ半分そろへ〳〵くひちぬ
ぬ〳〵ぬ名ぬ傍のく座うふようう〳〵く
ぬ〳〵ぬ名ぬ〳〵く退転ひれぬ
ぬ〳〵ぬ一体和尚をぬ〳〵く
ぬ〳〵ぬ開眼供養ぬ地蔵ぬ
ぬ〳〵ぬ里人ぬ今ぬ麻のぬれを

向ひく仏のと発ぬ〳〵て
釋迦ぬをだ弥勒ぬいまだそぬ方ぬ〳〵ぬ地蔵
とうみく小便をだ通り〳〵ぬ里人安う〳〵ぬ半〳〵ぬ地蔵
供養と申を半ぬ威儀正〳〵く経ど
半ぬるぬワけもあだぬよみち〳〵
傍ぬぶと人〳〵ぬ〳〵ぬ開眼を改る〳〵ぬ傍ぬ
製ぬ作ぬ〳〵ぬ地蔵菩薩絵をぬ〳〵ぬ
ぬ〳〵ぬ高座ぬ昇て発願の証ぬ
〳〵ぬ所の老若男女いのちぬ地蔵経をぬ〳〵く
ぬ〳〵ぬ脱のべ退浅らし〳〵く落向し〳〵く
ぬ〳〵ぬ田畠ぬ穂に穂さく人浦里の殺生をぬ〳〵く
ぬ〳〵ぬ大敬強盗ありし〳〵ぬ半分そろへ〳〵くひちぬ
ぬ〳〵ぬ名ぬ傍のく座うふようう〳〵く
ぬ〳〵ぬ名ぬ〳〵く退転ひれぬ
ぬ〳〵ぬ一体和尚をぬ〳〵く
ぬ〳〵ぬ開眼供養ぬ地蔵ぬ
ぬ〳〵ぬ里人ぬ今ぬ麻のぬれを

馬士の桃令ふる
常みーくるるる
変態ふる傷ふ
ふるる馬ふるれ
ふふふ
振ふるるも
ふぅ
蕉布の
ふくの細道ふ
月日ハ百代の
ふ客ふーて
ふふふもふ
旅人くふの上ふ
生涯ふうふ
馬の口
ふえて
花を
ひふふ
ふろ

日ふ
旅ふて
旅を
栖ふん
中を
書れし
ふふくの
情ふ
ふぞ
ふ

維恵寫

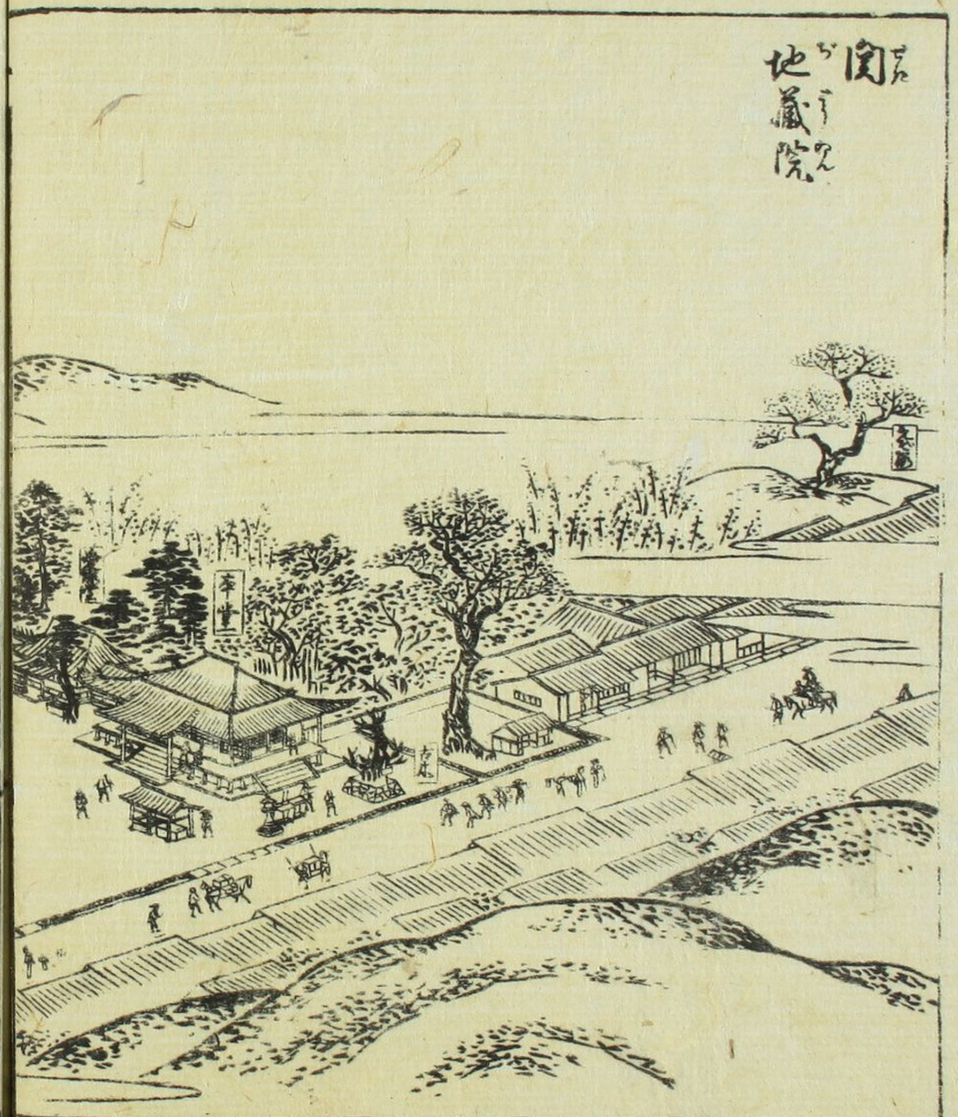
地藏不及招嫖榮
欲買相談約束成
寐處蒲團纔一牧
來時太敞已三更
羅繻寶帶數千盞
雲雨巫山二百情
昨夜幻妻今曉見
目珠飛出頓如蠶

胴胍

浪テ閑買招嫖

月溪畫




関地蔵院

太神宮別道



桑宮道　関騨東の入口にあり　東海及び東山より伊勢桑宮の宮まで凡そ十四里余名神澄標石あり　東海道より東海道へ通ず

出羽森　山田外宮まで十四里余名神澄標石あり　東海道より東海道へ通ず

古馬座　小俣村のうち出羽森　出羽黒権現仮に勧請しるし　羽黒山と云　宮川の南にあり村の名とせり天照太神五十鈴川の上へ遷座の時　縄生十八町あり右に宿所あり

布氣神社　天照太神宮と称ず　延喜式内今皇館太神宮の古趾と云　聖尻村にあり　延喜式内今皇館太神宮と称ず　例祭六月廿一日

亀山（伊勢）　猛獣多し　庄野より北へ弐里　亀山市中十七町　往古の城下の方に城あり　慶長の比岡本宇野宇とて人居城せり　今は石川度立城ある

森下　中富田村の内　八王子祠あり　海道より海向に通ず

庄野（伊勢）　往古に風さえをそひくくうつ笠の来もあけくくうのしるし道　名所口

名所記せる廿七町は駅の名ばかり　植野村という所あり　名馬生唼の出所なり　佐々木高綱が駿足宇治川の先陣せり　是則日本武尊の駿馬の示現なり　川くだり馬なり　能褒野の野陣　陵と土人称す　鞆家という　山やま陵のさま　拾八町東西弐拾九町南面く　今ふしかわうち　壺碓のたぐひ出る　神の方に高さ弐尺東西六尺許の石あり　是も倭武尊の御墓と云　奉鏡家という　倶に椎の木あり　又奉鏡家の向ト形あり　くるみを土もり十月お家の向七町

新土人は天狗と號し又陵邊の傷れ石造のお祠あり導の聖と稱めて今も參詣人絶ず此邊又其南手納所權現の社あり

古事記曰

日本建尊自阿豆麻幸行而到能煩野之時思國以歌曰

夜麻登波　國之　加岐夜麻　重疊　伊能知　命全　夜麻能　山籠　久麻加志　白橿　賀波曾　枕　歌者思國也

又歌曰

波斯　麗　祁　夜斯　我　和岐弊　我家　能迦多　由久　雲　毛　章　多知　起　久　來　母

此者片歌也此時御病甚急介御歌曰

袁　童女　登　床　賣能　遠　許能登　辨介　和賀　置　淤岐　斯都　流　岐能　太刀　多知　其　曾能　刀　多知　波夜

歌竟而即崩介貢上驛使於是坐倭后等及御子等諸下到而作御陵即匍匐廻其地之那豆岐田而哭云云

天皇大小哭泣ひ群臣小命として追ひ奉り葬まつる時に倭國小飛び群臣其棺を開きて倭國に持ち上り大和の琴彈原に陵を作る白鳥と化りて陵を營く時の人仆三陵を歸つく白鳥の陵と號く日本紀に見えたり

和泉國大鳥郡大鳥の社に日本武尊の靈を祭る

高富山瑠璃光院石藥師寺

本尊石佛藥師如來　長七尺六寸　新面石　真言宗　泰澄法師感得の像なり

當寺尊像金輪際より出現の靈石なり　聖武帝の御宇神龜年中誠の

泰澄仏所を通りかゝるに光曜々たれば下りて拝をなすに泰然さる樹林の中より異香薫じ十二神将あらはれ一箇の寿石を捧ぐ泰澄感悟して未世の衆生利益の為正しく醫王尊の示現なることを遠ざ一宇を創建さく霊石安置其後弘法大師泰澄の蹟を追ひ霊石をもつて醫王の尊容を彫刻し相好満足の真容を開眼供養ある真より霊應日々ふ新なり遠近の致禮絡繹森の如し仍由 嵯峨帝の勅願に達し精舎儲営建立あるく寺毫厘寡なく中古兵乱の比蕭寇上洛の時まくに焼亡丹誠を凝し武運を祈るに依つて今ふ枝葉栄えう迫くに天正の兵燹に罹く仏閣一時の煙となる幸ふ本尊ハ災を免れ燼中より忽然と現じ給ふ真仏の住職圓賢法印ハ碁徳の沙門なるく多の真仏教導人精茶を加持し世上の興隆揚雄成ふくある時夢中ふ示現あつて秘法ふ教導人精茶を加持し世上の興隆揚雄成さてふ珠ふく乳汁ふ紀婦人出る事疑のふし一法印夢覚さく教のふく世ふ弘むあれ公業師の八割米として一柳直盛虔当国神戸居城の時種々の寄特を

感じ本堂院内再建ある又寛永六年秋九月十四日秋当国四日市浜田村の長松の巣ふ蜜ふ多き十七日秋風頻ふ起く駅中の人民死亡をふさを村雀多く真疫死ふ代るとふ示現あり翌日当寺に告さく蜜のふく降るふ別当も同夢ふ感得せり果して十七日秋暴風驟雨おびたゞしく千羽死落せり人みか毒ふあたるとふく追悼の供養ふ仏壇真仏世ふ流布をる所之仏驚の奮号ふ依高富とひしを自然と霊尊ふ賞じく石業師とふひ山獅ふ高富とひしを自然と霊尊ふ賞じく

総過庄野郵有寺 高楼西福門前景 釋元暁
東方世界秋百荊無自性四大一浮一漚
刻石薬師佛此言願無点一頭

拝石薬師其制工 癒供方土本當東
露含凪碧瑠璃色 間出身途鑒鍾中 淳慧和尚

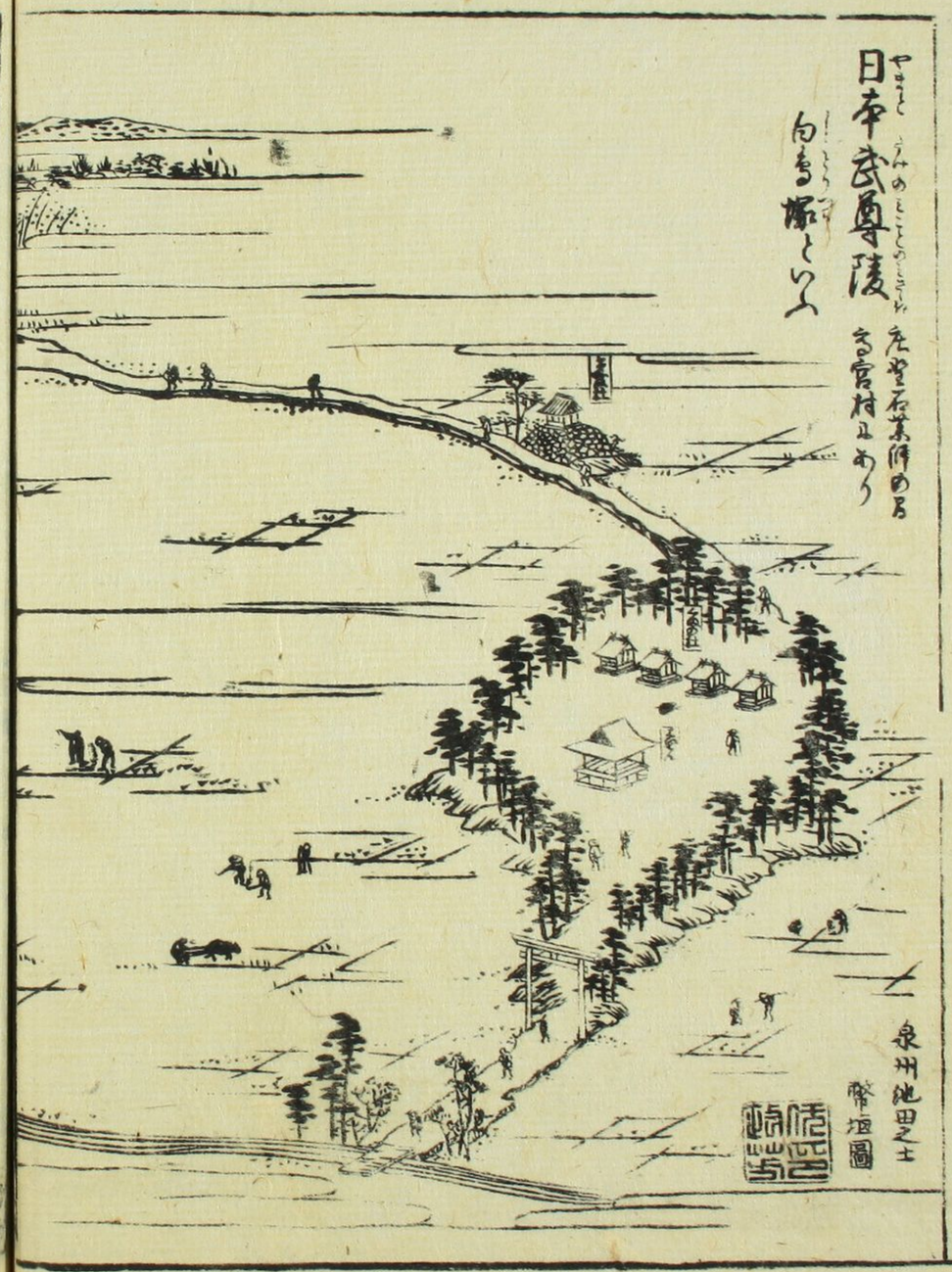
古への志しを今の世ふ残すふ仏の教へつゝしんで

御曹子範頼祠 石業師ふの向ひ民家の裏がふた林の内ふあり土人云ふ範頼と伝ふ枝葉栄ふ今ふ繁昌ふ枝葉栄ふ今ふ繁昌ふ枝葉栄ふ今ふ繁昌

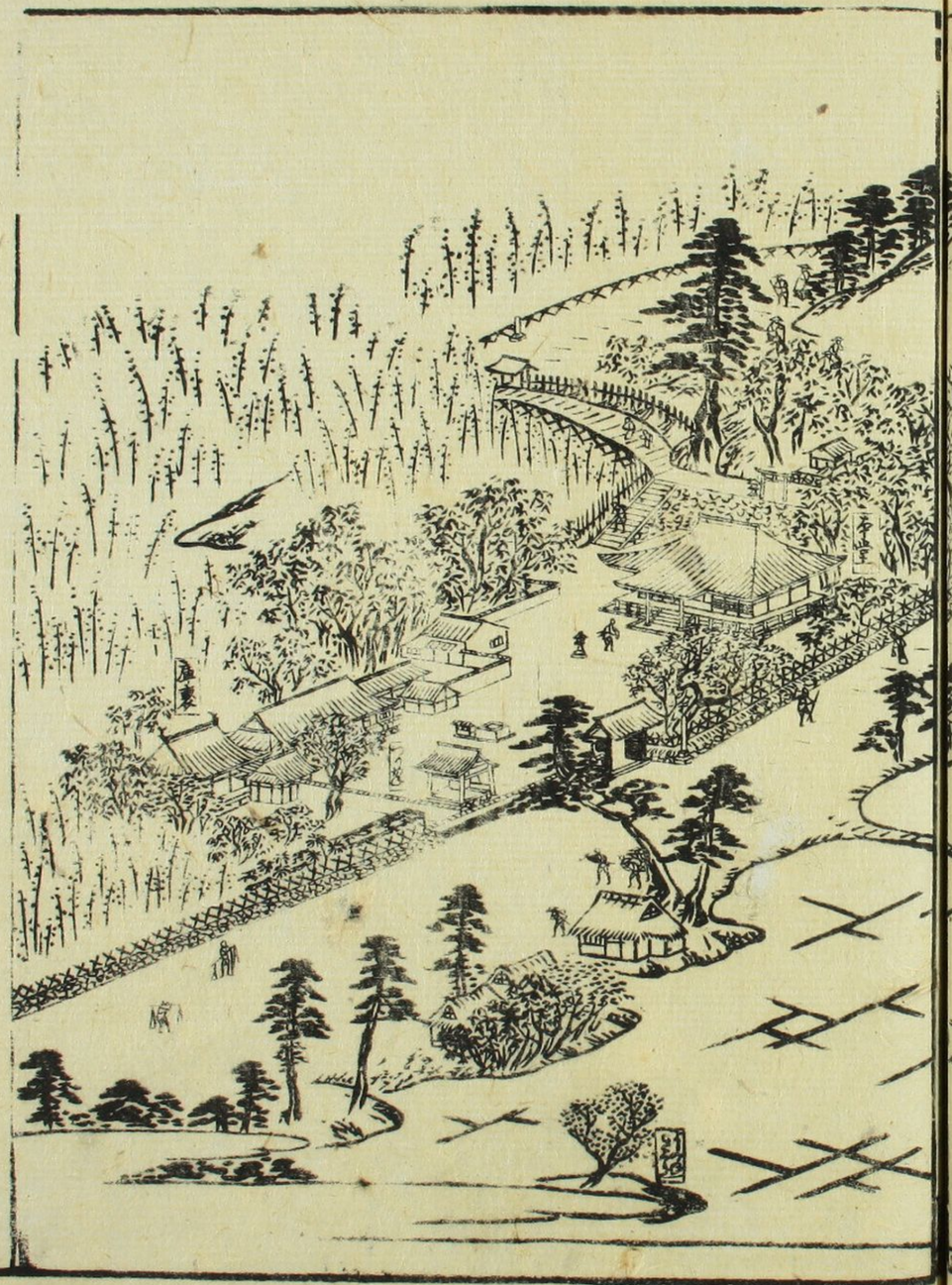
日本武尊陵　在堺石津神明の
北古墳上にあり

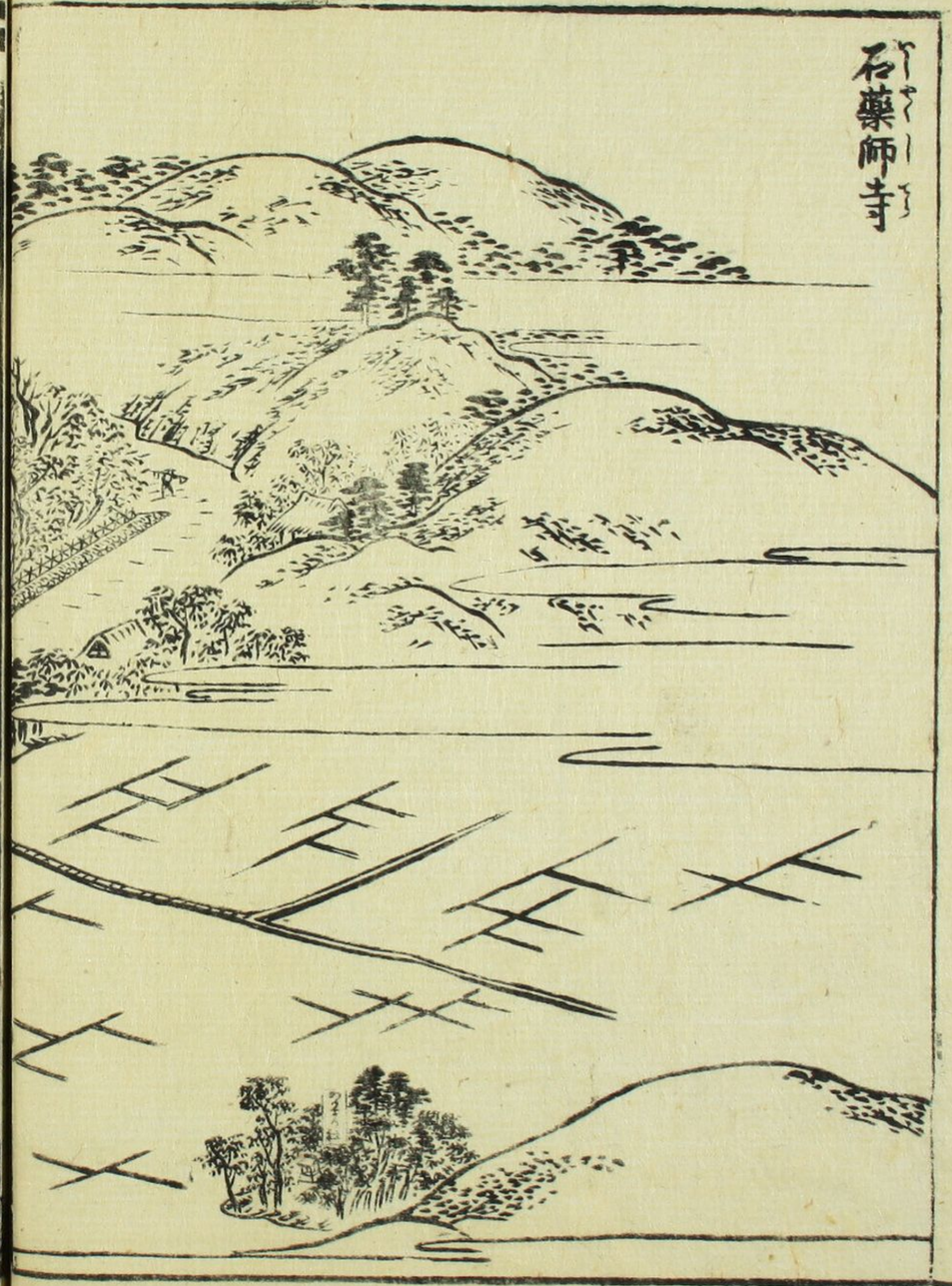
白鳥陵（しらとりのみさゝぎ）





泉州池田之士
幣垣圖




藥師寺

伊勢 **薬師** 四月辛未より八里弐拾七町山騨市中七町許

東の立場 **生立** 立ち、疲をやすめ、ひるの餉を整にす。

雅武尊祠 長澤村にあり。石深師驛中の方の方へ入る半里許

神日本武尊、伊弉冉尊の子。雅武尊王、母は橘媛あり。延年享保

年中は驛中に祠ありしが、神日本武尊と称し、林しげりく、日本武尊

社迹となり、人日本武尊と称し、伊久加泥都流

途比婆理都久婆袁須疑、氏文字なれども、鏡なく祠なければ、傳へのいひつたへ

乙老赤人古蹟 石深師驛の東小谷村右の方十三町許ふと村とあり

八十餘年以前、双ぶの老松ありて、赤人の棲所と、歌仙赤人の棲所と

像に彫人の硯水に汲しと、禁裏より毎年試筆の

硯水を汲ふ。運ぶ也。

園分寺趾 石深師の東の曲郡園分寺村にあり。今津七家とあり。常慶山と号した

往昔、元明帝甘老年中に官

杖衝坂 海道筋二あり。日本武尊東征の時、御所足を

より弘名あり。又右の方の山上に尊の血塚とあり。

あり。饅頭を製す。杖つき村の名あり。

古事記云

自當藝野上差少幸行固甚疲衛御杖稍歩故

号其地謂杖衝坂也

歩りかたは杖つき坂 日本武尊御所足を三重縣

あの坂は杖つきの名ある坂にて、

四方は佩ゆくるあの御劔をとゞめ

それ故春雄支これ坂を

されて甚薫発句九カ文字ふ自己が罪しく此意則

救園の人道之予あり。感をるの矩不朽の石也。

施客かのそうたのを

采女村 杖つき坂の東にあり。傳云 日本武尊御所の時三重の郡家より采女出

寛暦六季丙子秋八月之吉

傳云、采女を抱へ給ひ、采女も諸國より

役せらるゝ職業柔婦、階給仕し後世采女の職

追分泰宮道 山田より十六里

神明山王天満宮のつゞきあり又實蓮寺

日永村 此所一方金剛の茶店あり。一方の森は神

こゝより津七字の寺あり。くら屋もの尼ぎ住ゐ人沙尼門跡といへり

泰名をはくのぞ安されかし川の名 家誠

安國寺舊趾 日永より四日市の宿の方へ

心意海翁書八寛暦年中永

安濃土人

虎龍和尚刻と

年中織田信長

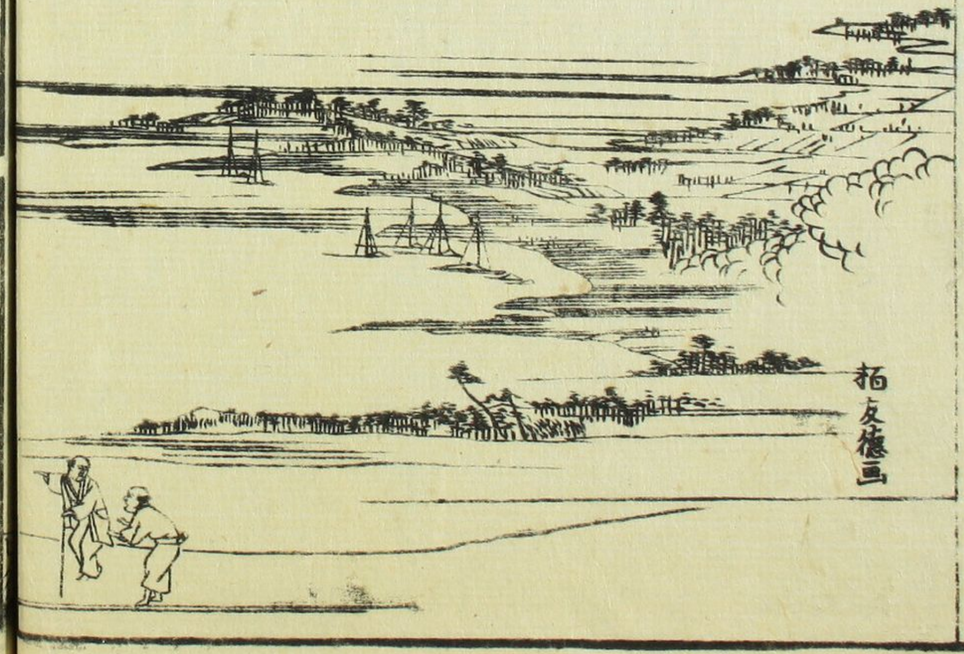
安國寺伽藍を焼

摂州四天王寺

那古浦

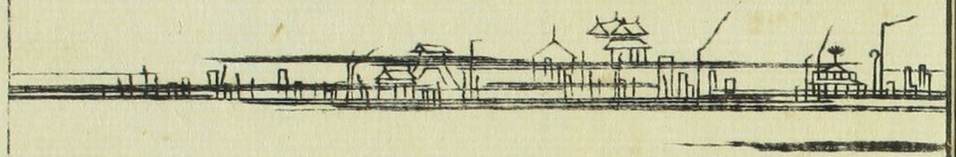
蜃楼

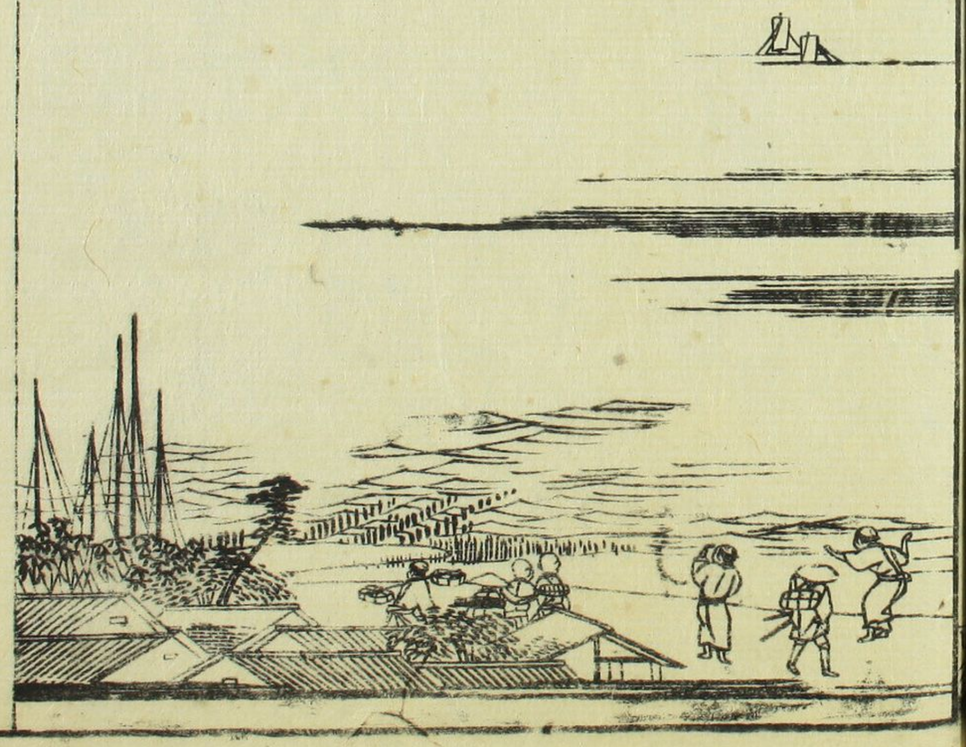




拓友徳画

蜃楼と
なづく
陽炎や
粟飯
つく
法の人
野夢





四日市（伊勢）

京名古屋三里八町 東海陸都會の地 旅舍ハ招牌ヲ出シテ客ヲ招ク 宿中繁昌ス 海上十里 桑名ヘ渡船アリ

四日市場人參ニ赴ク處ニテ商賈相ヒ遇フ交易漸ク得ル一日ノ多キ一廓中恐クハ價公超カ壽春青

諏訪神祠

四日市驛ノ東ニアリ邊傍群祠ノ中ニ最モ大ナリ 都テ味齒八重事代主命ヲ建御名方命ヲ建仁年中信州諏訪上社ヲ勸請ス或ハ三瀧川ト云フ或ハ三瀧ヨリ海ニ注ク山稜上ノ社ヲ耶那古ト云フ

桑神二座

三重川

四日市驛ノ東ニアリ一名沖瀧川ト云フ 或ハ三瀧ヨリ海ニ注ク山稜上ノ社ヲ耶那古ト云フ

古事記

日本武尊自其地幸到三重村之時亦詔云吾足如三重勾而甚疲故号其地謂三重

吾疊三重乃河原之礒裏尓如是鴨跡鳴河蝦可物

萬葉

永久くと三重の河原に出でゐて嘆かふ 或ハ云ク三重川の古渡り 四日市より七里許上流に延喜式内神社あり 山前ニ遺蹟アリ

三重勾の非果あらしそもむろの海道そのあやふく

東漸山建福寺

四日市ニアリ禪宗曹洞派總持寺ノ末寺七宇塔司十戸又學寮アリ

本尊釋迦佛

弁財天

弘法大師ノ作ト云フ 運慶ノ作ト云フ 客殿小堂アリ

鎮守

當山會式

那古海蜃樓

四日市ノ海濱ヲ那古浦ト稱ス 攝州ニ入ル大坂日和橋ノ南ヲ那古浦ト云フ 又紀中ニモ那古浦アリ 勢州那古浦未考 此浦ヨリ名呉ヘ行ク名呉ヨリ又那古浦ニ至ル 日本橋ノ南九町目ニアリ 又紀中ニモ那古浦アリ 勢州那古浦未考 此浦ヨリ名呉ヘ行ク名呉ヨリ又那古浦ニ至ル

十六羅漢　涅槃像　優ニ兆殿子等　出山釋迦　牧溪筆
十佛像　十三佛像　優ニ惠心等　拈華微笑　顏輝筆

當寺開基ハ芝堂了源和尚之總持寺二世我山和尚ナリ 芝堂和尚ハ去ル元和五酉の年入寂ス 芝堂和尚ノ開門ヨリ 今ニ至ル迄 那古浦ノ漁人時々ニ 金ヘ 芝堂ニ魚菜ヲ献ズ 其比ハ海潮ノ發生スル時ハ 此山門ノ下マデ 潮水ノ來リシト云フ 今ハ沙入ハ歌枕名所ナレハ 其ノ跡ヲ失ヒ 僅ニ芝堂ノ前ニ 小池ヲ殘スノミ

那古浦蜃樓

那古浦屋樓記

靜者天地之質也 動者天地之氣也 貧者如不論焉夫一氣之運動轉旋也 會氣者皆與焉 稟理有逍遥者有苦勞者有顛見仙人靈禽獸鱗蟲有羽毛者有隱匿者彼此萬一態皆一氣哉吾鄉四日市驛之爲地也在勢州北畔而遠望東南數十里

面二千大洋海門ニ矣是海門也南界ハ勢ノ之熊岳北
則尾州ノ海嶋也其間亦數十里有鬱洲及小一洲
數處點〻如二盆池ノ設ニ石然リ吾鄉所望不能抱取
其微而已春夏之交數月中一日晴霄和氣雲
靜ニ風收ラ將レ雨之前自リ熊岳至リ尾ノ之嶋忽爾烟霧
霾曀失ニ海門ノ所在ヲ而地如ニ連接ニ靄ト有物如雲
烟變態或ハ墓闕或ハ門闕前有ニ干旌後有ニ蓋路行
伍排列森ト乎奇觀不ニ可說也須臾湮滅而
山海景象復ニ平常ニ兵其顯見也發ニ南而移轉而
失ス北ニ古今不ニ違ヘ歲ニ率ネ五里ニ盖所ニ以爲ニ吾鄉名勝也
焉不ニ過吾鄉畔數千步ニ盖所ニ以爲ニ吾鄉名勝也
士人傳道ノ二所皇太神廟遊ニ幸スル于尾之熟田神
廟也博物者云勢州之北畔產ニ屬也尚矣盖以
爲其所ニ吐物者云勢灣之遊幸也屬之吐ク氣也
天理不レ可レ窮神慮不レ可レ測若夫天地間之一氣
運動轉旋爲ニ奇觀ヲ爲ニ名勝者非ニ邪秋里生將レ著ニ
東海道中ノ名所圖會ヲ求ニ貞カ之拙筆端之一氣哉

寛政七年乙卯夏五月

勢州四日市驛廳馬 曹西村貞卽 南

垂坂觀音

俗又某師堂ありと奥院あり其ニ
徒ヲ添和尚幸ニ獨ハ舟ヲ出ス都ヲ暗躬迴むり天合宗本尊ヲ
の去發ニ荒蕪次

志氏神社

朝明郡小漆村ニあり延喜式内
氏神天照太神荒魂ヲ祀ル

おもしろき人を思ふ志氏の清水綿ちろそでやさしくぬるる哉　舟洗眞人

西行菴蹟

鈴鹿川の上方二里許福の山北
今四日市ニ

栄名

伊勢

栄名城　三崎城ともいふ天正年中瀧川左近將監一益北勢
五城の一ツ栄名氏築領ス其後天正閒防ぎ景後。服部栄女正一正
一柳右近將監直盛。氏家内膳正卣和等次第ニ預ル！卣ヲ栄名氏の
後不ニ詳ニ慶松平筑次守ル
五城ありといへり

名産白魚　澳村赤須賀ともいふ

時雨鮨　秋冬の候美味あり此地
名物の一ツ

名物煬餅　漆畑村ニ出ス

町屋川　尾州小牧合戦和睦の後内大臣織田信雄ヲ豊臣秀吉ニ
旅客往來ニ茶店に火鉢を設ケ煬餅ヲ賣ル

栄名

宮まで九里栄名驛
小栄名あり、山州宇治郡に宇治あり愛宕郡に愛宕あり
年中已後の栄ニ栄名ニ專ラ栄名ニ稱ス
つゝじ栄花の驛ニ

四日市 業名の
たいこ富田 ぬけ
の 饅 給 名物
して そのさま
あく ふ 憩 さく 酒 と
動 こ れ 成
黄 疫 を

…… ろろや
ろた 給の
ふゆ
る
証 作

四日市 道中
せ 成 こ ふ 名の
妓 婦 あ り こ ろ
ぬ 人 優 ふ ー く
糸 の 名 め ろ
ね あ な 筒 げ

寄 筆 意

あ ー い
ろ ー さ
の の 名 さ
ひ ー く ら
海 う
ふ こ ろ う か
成

あ ん も 名 産 の 白 魚
給 み も あ ー ひ ろ ん
へ ー

春泉斎画

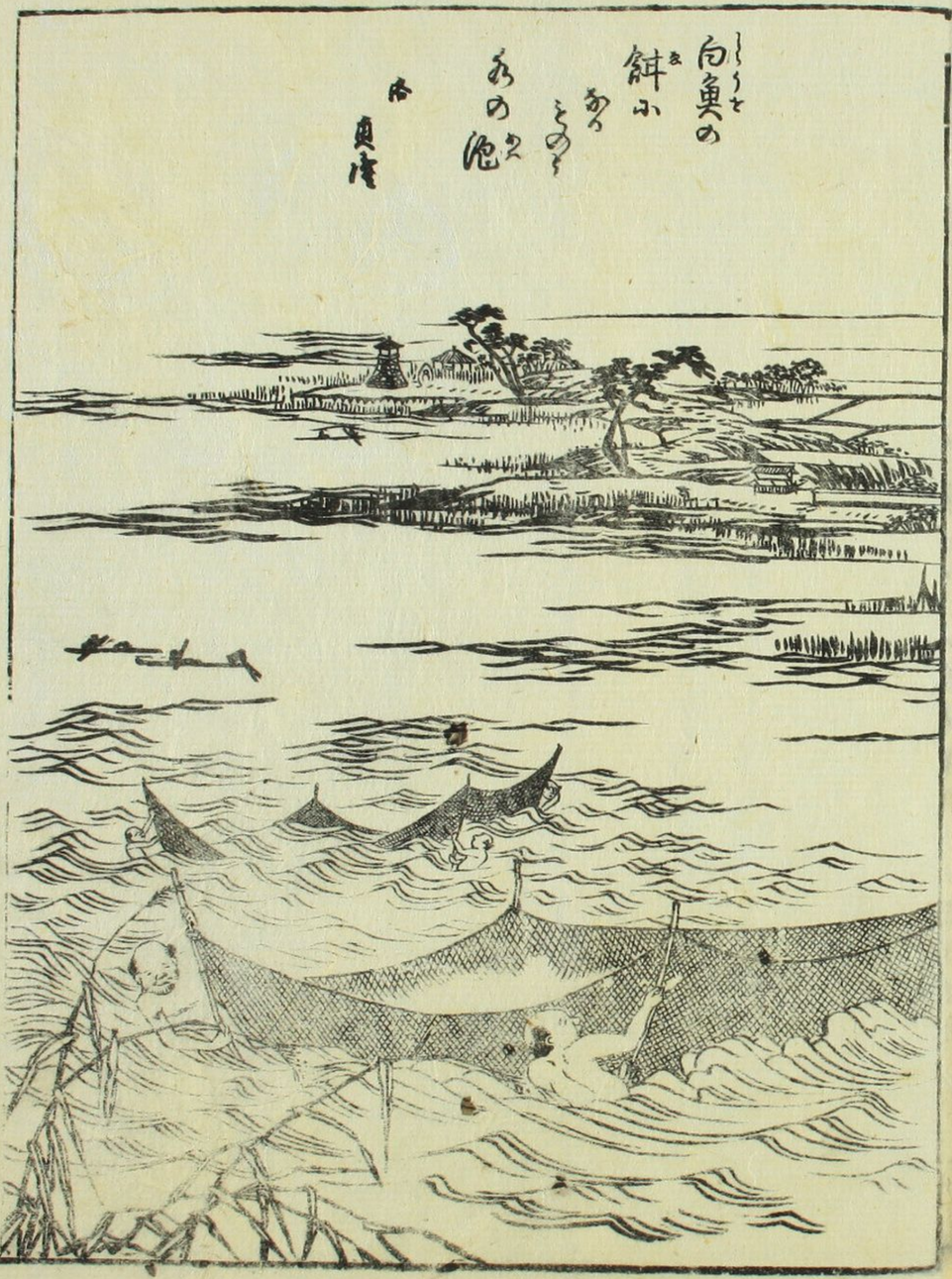
名の海そく
るをこゝろ
きて白魚
半ちりて
秋八月の初
ゝる時
味こゝろ
船の名
出たり



栢友畫

白魚の
餅ふ
あり
あの
魚

奥清



矢田八幡宮　棠名矢田町ふあり　慶長年中本多忠勝度会の山より此村へ遷し移す例条九月十九日又大日祠社地なあり

天武天皇社　同驛鴻巣町ふあり　天皇此地なの井ハ日本紀ふるく天皇の御供水とつく名跡あり天皇の御供水とつく名跡あり

例条六月十六日

一本松　本称する村の西田圃の中ふあり東西三十間許南北九間

一本松　本称する村の西田圃の中ふあり東西三十間許南北九間

〳〵四方表ム本陸ム山神祠あり津玄宗本称する旧跡ム

一本松　本称する村の西田圃の中ふあり東西三十間許南北九間

〳〵四方表ム本陸ム山神祠あり津玄宗本称する旧跡ム

一本松　本称する村の西田圃の中ふあり東西三十間許南北九間

〳〵四方表ム本陸ム山神祠あり津玄宗本称する旧跡ム

長圓寺　旧驛旧町ふあり浄土真宗西派初ハ真言宗旧地ハ城下の南江揚村の小郷ふあり　慶長六年今の地に移ル

本尊阿弥陀佛　俗名薛中古住職貫通本願寺蓮如上人ふ帰依し給ふと成明應五年二月九日寶如上人より方便法駅の勇縁ふ免せられ寺二世圓通ハ俗姓織田の家ふ依藤左馬頭義治とり

壽量寺　旧驛旧町ふあり日蓮宗身延山のまさく開基日意上人文明年中建立ふ所ハ駅旧町ふあり当国門徒ふつく開基ハ蓮如上人の勇ふ依ム

本尊阿弥陀佛　妙信ふの開基と同し什寶ふ日蓮上人の大曼陀羅あり真外教ふあり

額證寺　旧驛旧町ふあり当国門徒ふつく開基ハ蓮如上人の勇ふ依ム

上人ふ正徳年中西派ふ改く当国門徒とり

本尊阿弥陀佛　妙信ふの開基と同し什寶ふ日蓮上人の大曼陀羅あり真外教ふあり

壽量寺　旧驛旧町ふあり日蓮宗身延山のまさく開基日意上人文明年中建立ふ所ハ駅旧町ふあり当国門徒ふつく開基ハ蓮如上人ふ依ム

本尊阿弥陀佛　妙信ふの開基と同し什寶ふ日蓮上人の大曼陀羅あり真外教ふあり

額證寺　旧驛旧町ふあり当国門徒ふつく開基ハ蓮如上人の勇ふ依ム

上人ふ正徳年中西派ふ改く当国門徒とり

本尊阿弥陀佛　妙信ふの開基と同し什寶ふ日蓮上人の大曼陀羅あり真外教ふあり

額證寺　旧驛旧町ふあり当国門徒ふつく開基ハ蓮如上人の勇ふ依ム

上人ふ正徳年中西派ふ改く当国門徒とり

本尊阿弥陀佛　妙信ふの開基と同し什寶ふ日蓮上人の大曼陀羅あり真外教ふあり

壽量寺　旧驛旧町ふあり日蓮宗身延山のまさく開基日意上人文明年中建立ふ所ハ駅旧町ふあり当国門徒ふつく開基ハ蓮如上人ふ依ム

末社 神明 祖堂 若宮八幡 多度 酒解神
荒神 白山 拝子 住吉
當社ハ伯母山地主神ヲ以日吉山王大宮神社ト延喜式内 梁名神社トヲ合
祀ルノ處ニ三崎明神ヲ以日明神ヲ梁名益田庄業都村ニ移シ同帝永仁二年八月十八日益田名
ノ加良部ノ内仏母山ノ社地ヲ以テ移シ 同帝正應二年南都村ニ移シ後伏見院御宇
梁名城西ノ角ノ方ニ鎮座ス古代ノ能ク
諺云ヒ下ニ奥繞ヲ要ス

稲龍石 梁名寺町ニアリ永祚東年預寺ノ梅菓所ニ梁名御坊ト称シ初ル
教如上人ノ息女 長姫君法体ニテ葬量院殿ト号ス門徒僧
住職ヲ以テ寺中ニ守ラシム未タ
弐百余年尾濃ニ散在ス

輪崇寺 所ニアリ高田派初ノ仏心宗ニシテ唯仏房ト改ム
圓教房親鸞聖人ヲ師トシ奉リ 六十二才像 光明本 一幅 聖人ノ
自作 真筆

本尊阿弥陀佛 親鸞聖人ノ
文殊像 梁名城下十町許西ニアリ東本願寺ノ末寺ニシテ九ノ持ニ在リ
後寛仍都ノ末寺ニシテ
余流ヲ慕ヒ初ハ自疑派
當寺ハ親鸞聖人六十二歳ノ時東関ヨリ洋洛ノ時
ニ着舟ノ地ニ草創ス
遥ニ旧地ヲ今ノ
走井山ノ辺隣地ニ移シ
堂門ニ垂仰多シ

神寶山法皇院六福田寺 梁名城下十町許西ニアリ東本願寺ノ末寺ニシテ九ノ持ニ在リ
真言宗仁和寺御室ノ御法流ニシテ
毎月十五日開扉辺隣都集ル

正観音 右脇檀ニ安ス長弐尺三寸カラ
寛平法皇持念ノ本尊當山ノ
寛平法皇宸影 左脇檀ニ安ス其
堂内ニ垂仰多シ
聖天堂 本堂ノ南ニアリ醍醐三宝院
十一面観音 ノ墓僧正
ノ作 鎮守 天照太神
門前ノ山腰ニ鎮坐

什寶

○八相成道画圖 聖徳太子御筆當寺第一ノ什宝之ヲ相伴フ
○十六善神繍 聖武帝御寄附ニ八佛曼陀羅 同帝御寄附
○如意輪観音 聖武帝御寄附 文殊菩薩繪 村上帝御寄附
○金剛界大日像 淳和帝御寄附 ○金剛子念珠 寛平法皇御持
○不動尊 弘法大師作 同尊 ○紺紙金泥龍施女経 光明皇后御筆 ○當寺縁起
○二菩薩法号 後陽成院宸筆 ○當寺縁起 西二条門大臣實清公筆
其外数品アリ

当當山ハ 用明天皇御宇 聖徳王ノ草創ニ真濫 天武帝 持統帝等
ノ尊アリテ 聖武帝ノ皇后ヲ神宮奉幣ノ御當山ニ
般若會仁王會アリ
幸アリテ千僧法樂會ヲ執リ行ヒ弘法大師ハ一夏安居シテ密ノ法ヲ
修シ真言ノ道場トシ淳和帝ノ御時ヨリ勅願真言ノ梵刹

寶來法皇宇多天皇皇太神宮へ法樂を修ぜんとて當寺へ幸あり〻く皇太神宮の
新向ふ作侍の八月を果〻日ふ祭こまあに遊觀〻ゆへ困疲方支を引宮とし〻く
法皇院と號を後冷泉帝も永業七年正月幸有て一夫僧ふ發て勅會の
續經あり其後弘安元年大炎ふ罹く伽藍烬燼しゆ中興伊勢長官額田部
大和ち實澄神託ふ蒙り忍性上人（此時興正菩薩の上足たり）と心を合せ再建ふ及び
福田寺と號し忍性を中興とし神託の靈應慮圓ふ違〻後宇多帝の
勅願寺勢の額ふ賜へ足利將軍尊氏尚ふ尊信〻く大の字をそゝく
大福田寺と称を世人口〻大寺と呼び殿后明應ち大正に至ふく教令ふの無變に
罹ふお往古の南伊勢山田ふありく神宮寺たり唯一ふありし時ふ來名郡に移ふ
近世方治二年ま〻安濃郡江場村の内ふ移ふ
のありし所ふ故ふ今ふ村ふもふれど北伊勢ふ於ふく勅願の靈場眞言の古刹に
於ふくふ及びふし〻ふ塔頭二十七院末寺四百四十餘ちるありし〻衰廢
御寶殿 宝冠阿ふありし〻 持統天皇の御尊像 又天武天皇尊の御二体の神寶ふ ちふ姑く納置し所ふ
又圓寺 來名八江町ふありし淨土宗 西山二十世快譽法印の化靈佛阿弥陀如安ふ体の
本尊文殊菩薩 當山二十世快譽法印の化靈佛阿弥陀如安ふ体の
仁明帝御宇呂運和尚開基其後智證大師中興
本尊阿弥陀佛 恵心僧都脇檀阿弥陀勢至
お繪 某所ふ
鎮ふ

佐乃富神社 御室嚴社也ふあり
中臣神社 延喜式内
佛眼院 來名奥居通ふあり天台宗 東嚴山ふ
額縣書ふく寶興山ともいふ 玄龍の筆
本尊文殊菩薩 當山二十世快譽法印の化靈佛阿弥陀如安ふ体の
又十一面觀ち二宝荒神共ふ快譽の作
什寶
○紺紙銀泥華嚴經行願品 恵果阿闍梨筆。延喜寺緣起 學者親王筆
○涅槃像 唐筆 繪ち周色彩表ふ纏ゆふ比叡の妙画之

已上

當寺の開基ふ傳教大師〻く滋海院と号し〻ふ
延喜帝の御時ふ三神ふ神の神宮寺
勅願法下ふ長寿ふ〻く百七十餘の齢ふ保ちて登天とふありし寛和年中
の住職ふ天尊法下〻く當寺ふ
仁明帝御宇呂運和尚開基其後智證大師中興
本尊阿弥陀佛 恵心僧都脇檀阿弥陀勢至
お繪 某所ふ

已上

什寶
○十王画像 顯輝筆 冊帳ふ藏ふ。天黒天像 傳教大師作 授頓市と号ふ異相之
○地藏菩薩 慈覺大師作 俱ふ唐筆古画 己上
當寺ふ慶長年中 來名邑町ふありし今ふ一邑町とふく武士屋數ちある

柳堂法盛寺 東名萱町ふあり 浄土真宗西派 末寺六十 修覆寺北伊勢ふあり 法雲仏長三尺餘 開基うつく奥州秀衡の持尊と 経蔵 延享寛政二年造立額 般若心経 東福寺の額と算迦うつく 佳瑞をあらわす 金鼓堂 鼓楼 堂ふあり 書院 額柳堂 宝鏡寺宮理秀尼公筆 当寺は原文台宗ふりしが三州額田郡矢矧ふあり嘉禎えその仏親鸞聖人柳堂と称ひ聖人の所持する忠円房任賦 所作洛の時あり小濱ふあり 入り宗し改め十字の名野ふ勝人 今ふ存立に忠円房ハ奥州伊達秀衡の支族文永七年十月十七日寂ひ六世孫慶應仁の乱と逃く 努州奈名郡柳田庄三所に移って柳堂 阿弥陀寺と号ひ第十世権大僧都祐珍法盛寺と改め又坂石山本願寺圓乱の時歿如上人ら軍勢催促ありし 十二世得全院寂然 本願寺准如上人の孫 十六世くそ守へ代々兼連枝うり当時寺職ちくまで

最勝寺 本願寺は浄ふあり 右同宗西派当る原 真言宗と 本尊阿弥陀佛 春日の作 初八同国長嶋城ふありく西勝寺と号ひ 末る百八十餘ふ門徒五千餘家あり 長嶋一乱の時庄州辰田ふ移って真宗 東名ふ轉化享保年中西本願寺院家ふ進ちく当時寺職ちくへ 代一世とぐ 又 其上小作非源氏書し 薬師一向所化 元和中城主松平隠州庄行初ふ 地ハ城西橋際と云所 持統天皇勅願の 本尊釈迦 坐像 正観音 金銅 坐像 係天竺伝来

不動院 日前ふあり 真言修験道醍醐三宝院ふ属ひ旧名天林寺と 元和中城主松平隠州庄行初ふ 地ハ城西橋際と云所 持統天皇勅願の 本尊釈迦 坐像 正観音 金銅 坐像 係天竺伝来

赤須賀地蔵尊 赤須賀東堤の上ふあり 龍宮山 佐々木氏ほりし大聖地蔵王 額 龍宮山 徳海禅師の像 芭蕉翁句碑之

常燈明 資福年中 次定 没海避難の標とん 白魚塚 東名より西南の 滄海ふ

伊勢海 古今

いせの海ふ 釣をする あまをうたふ 歌を定ふ

法眼 いその海に 塩をくむ あまの袂夜ふ

後吉 ぬれ衣海のあまのぬれ衣 なれてまふ

後千 いせの海ふ あまのつりせし 初く春

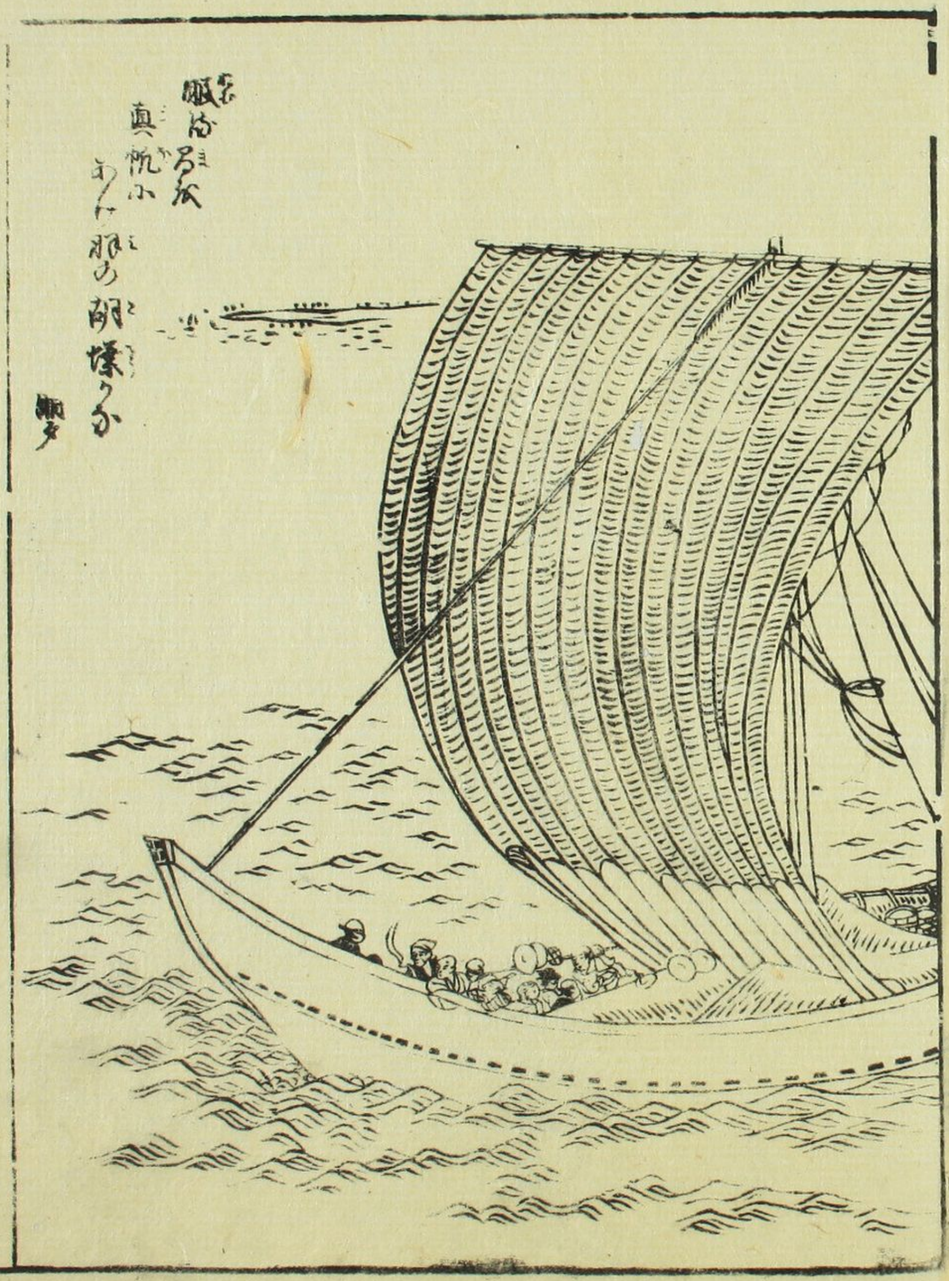
いそうみふ そそうある

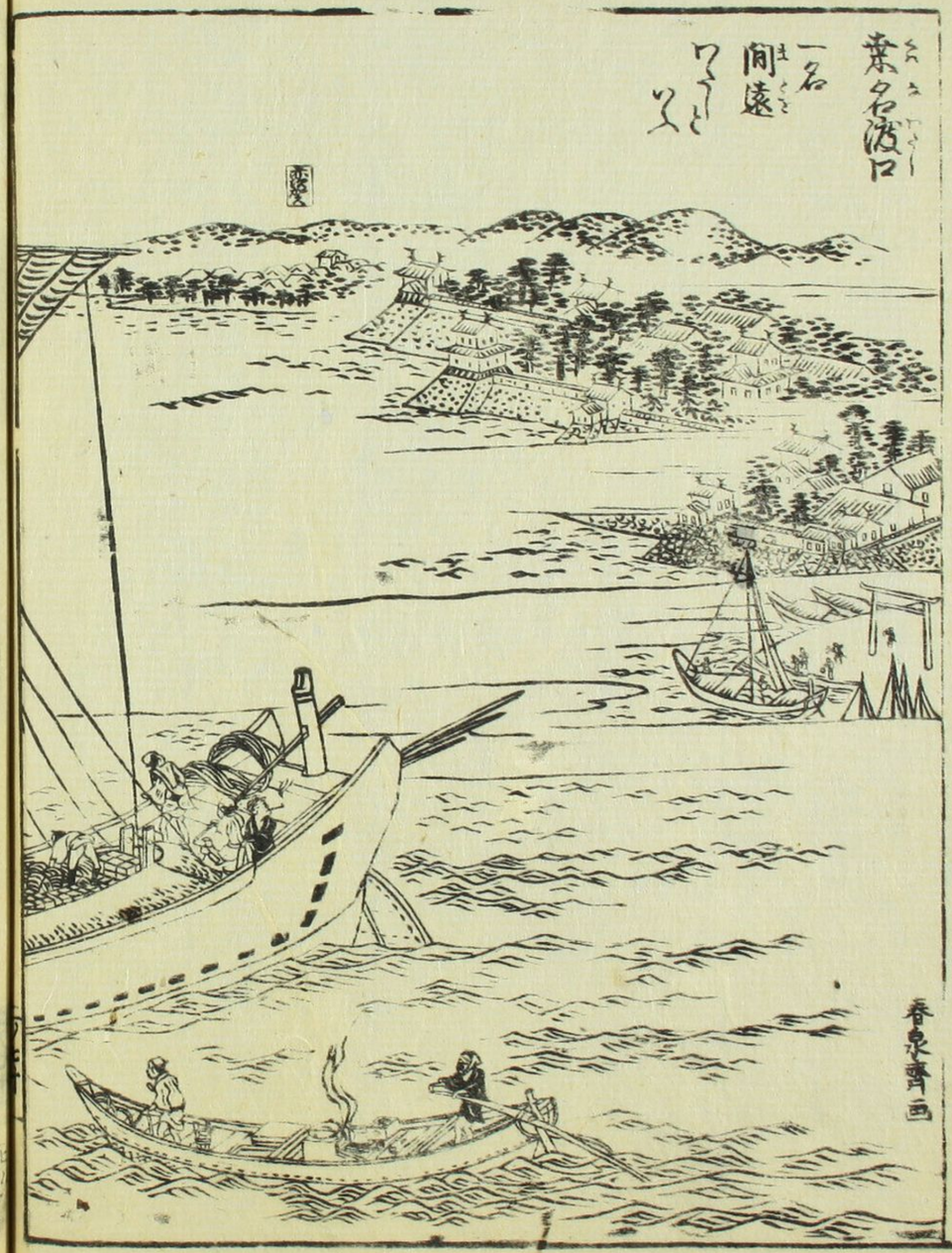
いせの海ふ あまのつりせし それなくも

後拾遺 立ち寄る波の ちとせの声ぞ 石ふきうせむ

新千 いせの海士ふ 日ろうね 塩干のくさに 数るあり

雲の上ふ 源恵




春泉書画

尾張

熱田

神宮 尾張國愛智郡熱田にあり 祭神天照大神 日本紀曰 素盞嗚尊 天叢雲劍を得て天に奉る 是を草薙劍と名く 日本武尊 東夷を征し給ふ時 此劍を以て草を薙ぎ 火難を免れ給ふ 故に草薙劍と名く 日本紀曰 景行天皇四十年是冬 日本武尊 初め東夷を征し給ふ時 駿河國に至り 其國の人 野に火を放ち 王を欺き 王 野中に入り 火に圍まれ 出る事を得ず 是に於て王 劍を以て草を薙ぎ 火を向ふに放ち 火 反りて燒亡す 故に名を改めて草薙劍と曰ふ 日本武尊 尾張國に至り 宮簀媛を娶り 久しく留まり給ふ 尾張國風土記曰 尾張國の國號 昔 天火明命 天より降り 此國の高倉山に到り 尾張大國靈神 天香山の社の土を以て 天の平瓮八十枚を造り 天神地祇を祭り給ふ 故に尾張と號く 又 天火明命 天より降り 尾張國の富士山に到り 亦 天香山の土を以て 天の平瓮八十枚を造り 天神地祇を祭り給ふ 故に富士と號く 又 天火明命 天より降り 伊豆國の天城山に到り 亦 天香山の土を以て 天の平瓮八十枚を造り 天神地祇を祭り給ふ 故に天城と號く 三處 皆 天香山の土を以て 天の平瓮を造り 天神地祇を祭り給ふ 故に三處 皆 天香山と號く 又 天火明命 天より降り 伊豆國の三島に到り 亦 天香山の土を以て 天の平瓮八十枚を造り 天神地祇を祭り給ふ 故に三島と號く 又 天火明命 天より降り 相模國の大山に到り 亦 天香山の土を以て 天の平瓮八十枚を造り 天神地祇を祭り給ふ 故に大山と號く 又 天火明命 天より降り 武藏國の氷川に到り 亦 天香山の土を以て 天の平瓮八十枚を造り 天神地祇を祭り給ふ 故に氷川と號く 又 天火明命 天より降り 上總國の清川に到り 亦 天香山の土を以て 天の平瓮八十枚を造り 天神地祇を祭り給ふ 故に清川と號く 又 天火明命 天より降り 下總國の香取に到り 亦 天香山の土を以て 天の平瓮八十枚を造り 天神地祇を祭り給ふ 故に香取と號く 又 天火明命 天より降り 常陸國の鹿島に到り 亦 天香山の土を以て 天の平瓮八十枚を造り 天神地祇を祭り給ふ 故に鹿島と號く 又 天火明命 天より降り 陸奥國の靈山に到り 亦 天香山の土を以て 天の平瓮八十枚を造り 天神地祇を祭り給ふ 故に靈山と號く 又 天火明命 天より降り 出羽國の鳥海山に到り 亦 天香山の土を以て 天の平瓮八十枚を造り 天神地祇を祭り給ふ 故に鳥海と號く 又 天火明命 天より降り 越後國の彌彦山に到り 亦 天香山の土を以て 天の平瓮八十枚を造り 天神地祇を祭り給ふ 故に彌彦と號く 又 天火明命 天より降り 佐渡國の金北山に到り 亦 天香山の土を以て 天の平瓮八十枚を造り 天神地祇を祭り給ふ 故に金北と號く 又 天火明命 天より降り 丹後國の彌豆山に到り 亦 天香山の土を以て 天の平瓮八十枚を造り 天神地祇を祭り給ふ 故に彌豆と號く 又 天火明命 天より降り 但馬國の出石に到り 亦 天香山の土を以て 天の平瓮八十枚を造り 天神地祇を祭り給ふ 故に出石と號く 又 天火明命 天より降り 因幡國の大山に到り 亦 天香山の土を以て 天の平瓮八十枚を造り 天神地祇を祭り給ふ 故に大山と號く 又 天火明命 天より降り 伯耆國の大山に到り 亦 天香山の土を以て 天の平瓮八十枚を造り 天神地祇を祭り給ふ 故に大山と號く 又 天火明命 天より降り 出雲國の三穗崎に到り 亦 天香山の土を以て 天の平瓮八十枚を造り 天神地祇を祭り給ふ 故に三穗と號く 又 天火明命 天より降り 石見國の高角山に到り 亦 天香山の土を以て 天の平瓮八十枚を造り 天神地祇を祭り給ふ 故に高角と號く 又 天火明命 天より降り 隱岐國の知夫里島に到り 亦 天香山の土を以て 天の平瓮八十枚を造り 天神地祇を祭り給ふ 故に知夫里と號く 又 天火明命 天より降り 伊豫國の石鎚山に到り 亦 天香山の土を以て 天の平瓮八十枚を造り 天神地祇を祭り給ふ 故に石鎚と號く 又 天火明命 天より降り 土佐國の土佐山に到り 亦 天香山の土を以て 天の平瓮八十枚を造り 天神地祇を祭り給ふ 故に土佐と號く 又 天火明命 天より降り 筑紫國の日向の高千穗の峯に到り 亦 天香山の土を以て 天の平瓮八十枚を造り 天神地祇を祭り給ふ 故に日向と號く 又 天火明命 天より降り 肥後國の阿蘇山に到り 亦 天香山の土を以て 天の平瓮八十枚を造り 天神地祇を祭り給ふ 故に阿蘇と號く 又 天火明命 天より降り 薩摩國の開聞岳に到り 亦 天香山の土を以て 天の平瓮八十枚を造り 天神地祇を祭り給ふ 故に開聞と號く 又 天火明命 天より降り 大隅國の高千穗の峯に到り 亦 天香山の土を以て 天の平瓮八十枚を造り 天神地祇を祭り給ふ 故に高千穗と號く 又 天火明命 天より降り 日向國の霧島山に到り 亦 天香山の土を以て 天の平瓮八十枚を造り 天神地祇を祭り給ふ 故に霧島と號く 又 天火明命 天より降り 壹岐島の天山に到り 亦 天香山の土を以て 天の平瓮八十枚を造り 天神地祇を祭り給ふ 故に天山と號く 又 天火明命 天より降り 對馬國の金田城に到り 亦 天香山の土を以て 天の平瓮八十枚を造り 天神地祇を祭り給ふ 故に金田と號く 又 天火明命 天より降り 新羅國の白木山に到り 亦 天香山の土を以て 天の平瓮八十枚を造り 天神地祇を祭り給ふ 故に白木と號く 又 天火明命 天より降り 百濟國の白木山に到り 亦 天香山の土を以て 天の平瓮八十枚を造り 天神地祇を祭り給ふ 故に白木と號く 又 天火明命 天より降り 高麗國の白木山に到り 亦 天香山の土を以て 天の平瓮八十枚を造り 天神地祇を祭り給ふ 故に白木と號く 又 天火明命 天より降り 渤海國の白木山に到り 亦 天香山の土を以て 天の平瓮八十枚を造り 天神地祇を祭り給ふ 故に白木と號く 又 天火明命 天より降り 靺鞨國の白木山に到り 亦 天香山の土を以て 天の平瓮八十枚を造り 天神地祇を祭り給ふ 故に白木と號く 又 天火明命 天より降り 女國の白木山に到り 亦 天香山の土を以て 天の平瓮八十枚を造り 天神地祇を祭り給ふ 故に白木と號く 又 天火明命 天より降り 裸國の白木山に到り 亦 天香山の土を以て 天の平瓮八十枚を造り 天神地祇を祭り給ふ 故に白木と號く 又 天火明命 天より降り 黑齒國の白木山に到り 亦 天香山の土を以て 天の平瓮八十枚を造り 天神地祇を祭り給ふ 故に白木と號く 又 天火明命 天より降り 長人國の白木山に到り 亦 天香山の土を以て 天の平瓮八十枚を造り 天神地祇を祭り給ふ 故に白木と號く 又 天火明命 天より降り 小人國の白木山に到り 亦 天香山の土を以て 天の平瓮八十枚を造り 天神地祇を祭り給ふ 故に白木と號く 又 天火明命 天より降り 大人國の白木山に到り 亦 天香山の土を以て 天の平瓮八十枚を造り 天神地祇を祭り給ふ 故に白木と號く 又 天火明命 天より降り 君子國の白木山に到り 亦 天香山の土を以て 天の平瓮八十枚を造り 天神地祇を祭り給ふ 故に白木と號く 又 天火明命 天より降り 淑人國の白木山に到り 亦 天香山の土を以て 天の平瓮八十枚を造り 天神地祇を祭り給ふ 故に白木と號く 又 天火明命 天より降り 有德國の白木山に到り 亦 天香山の土を以て 天の平瓮八十枚を造り 天神地祇を祭り給ふ 故に白木と號く 又 天火明命 天より降り 無德國の白木山に到り 亦 天香山の土を以て 天の平瓮八十枚を造り 天神地祇を祭り給ふ 故に白木と號く 又 天火明命 天より降り 不死國の白木山に到り 亦 天香山の土を以て 天の平瓮八十枚を造り 天神地祇を祭り給ふ 故に白木と號く 又 天火明命 天より降り 不老國の白木山に到り 亦 天香山の土を以て 天の平瓮八十枚を造り 天神地祇を祭り給ふ 故に白木と號く 又 天火明命 天より降り 不病

未社 伊津久志祠 八幡宮 一巻祠 稲荷祠
八王子祠 両宮 鉾立祠 山神五座 竈神祠

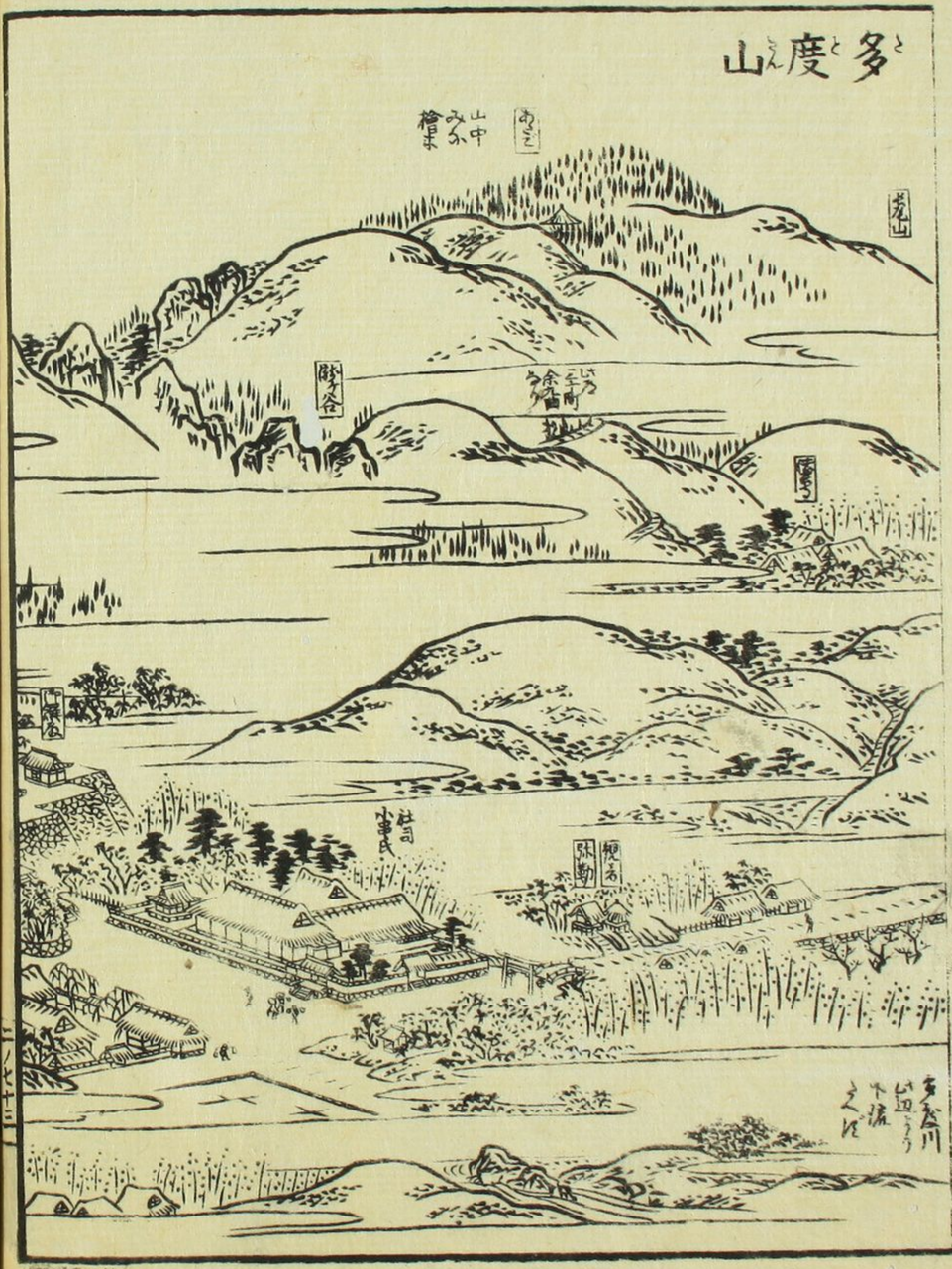
主当社の鎮坐六年歴久遠ありて
村尾津村等の邑里みな神領ありて
ふもとれども朽む故ふし村民流れ
及ぶ織田家の令を奉ふ瀧川一益大将軍として長滝多度の
止事なく山村多度神社経営小屋
の況本多忠勝侯奈名左城の
尊崇ありて大賽奮観小屋ども
繡馬あり神領の村民神前小旗
幸ふ日神輿ご基小山村の東
辺国辺郷の老若袖を
神事痢降月朔日ふら皆形餅を
仮名法宝ということ真言宗ふく

あり訪見地蔵弥勒堂観音堂ご倶ふ
幣殿神饌殿神輿舎ふ水訪ふみ
抔末社内外の神小祠ふ多度
多度川 水源八壺渓の下流岩ふ
不思議ありと書り土人云ふ流水
神水其地の様ふ
多度の登ーろ實ふ神国の中ふ神国たる
多度川の清きふれ
或ふ云多度権現ふ
落葉川 多度本社の傍より
落葉川をふ

宮人の家名ふ
多度梅 多度桃 倶ふ名産
多度のむ光

神風ふ北の要や
七色椿 本社石階の下ふあり七色の
花ひらく城を山崩に是多度明神の
去り一方ふ来名城下ふ

多度山





五石　多度山ふもとの岩石あまたあり　一古墳より世に名ある石立て前にあり
　　龍石　烏帽子石　御纏石　影向石
仏五尊の像　龍石の本社の後ろにあり辺幸　明和辛巳年七月十八日　亀石
自然と山腹より　巌ふもとに　一寸許の穴の水あふれ止ず　慶大の岩石懐乃本
ふもとより五六丁　古代のまま　寺代のふ思議と人々いひあへり　其石の下より
古鏡二十面　古銭一振　陶器十品　石品　古銭　文字　壹文出
小二二寸　背に州花　獣鳥の鏡形　至極古代の体あり　則領主へ献ず　又ハ
窟あり　言上ふ及ず　今神庫に蔵む
朝祥峯　社領の後ろをいふ　紀頂より南勢志州　伊州　江州之東ねの方なり
　　濃州　尾州　三州　信州　尾州富士山等見ゆる
瓢箪山　本社のあれ峰をいふ　西御社　岬ありて　生垣之事　柿之
岩名山　本社の東れ　立石峯　本社の坤の方
長尾山　上り愛宕の西　鷲倉　別当坊　社領の内
　　麓より嶮路三十町許　法会ある地なり
上愛宕　諸国眼下ふかん　絶壁あり　獨鈷水　一巻洞のあふれ落ち
八壺渓　両岸　絶壁　弘法加持水となり
　　あり　其路傍の巌に風蘭石蘭　忍州多し
山石渕　八壺渓の下流　水中ふかく下流ふかし　流れおのづから
　　地中へ　流れ込む
佐屋　尾州の界内と　桑名より川舟三里之
　　あり　尾州宮へ　至る　佐屋廻しと
　　騒長あり　ハ　岩天王へ半里

紀行

くり舟日ハ海をいとひて今朝漕ありき　志州の佐屋ハ海の
多鯨　怖と人の父なや　佐屋泊
津島渡　尾州門真庄ハ岩渡八雲御抄ニ出
古歌多し
伊勢人のひまをしらぬハ津島より甲斐川まで
　　(秋篠業　真蔭　道記)
ふの日ハり程人と船人ハ津島の門より風も吉ふく
津島より桴さへ　七日市桴と云ふく　名江あり甲斐川ふく　名所乃原
七日市桴と云ふく　津島の渡と云所ふ舟あり　(河勝皇子　為り法師)
はるゐぬ駒も立ぬれば菅の深葉ふ浪ふ　(罪面陸ふふく)
もりふる桴の末枯ふ　(ふみあれをほふ)
さしもあらぬふふみあれをほふ
渡りそふとハおそりの風ふうばり　名汗岡ふ郭湯の新ちさしく　焼世の墓ふ
鎗峠あり小笹の末ふ駒ハ立ふく　(他人あり　みちの記と云ふ紀行)
(海道記ハ下ふ長明と云ふ)
あり　(光りの紀り　已下引書毎ふ)

津嶋
牛頭天王

夕立や
塵も流して
神の恵
乙由


六月十五日
四条河原の祇園会
二条城
尾州公能て
のお観覧

津島牛頭天王 津島神傳はあり此神の生玉神ら
例祭六月十二日
祭神素盞嗚尊 本社の右にあり素神綱田明神 本社の右にあり素神 内外皇太神宮 鎮座
一王子祠 本社の右にあり素神 内外皇太神宮 鎮座
八王子祠 本社の右にあり素神 内外皇太神宮 鎮座
拘宮 透廻の右にあり 居森祠 本社の右にあり素神 内外皇太神宮 鎮座
牟禮社の神傳を鑑に此地の舊名を藤波里といふ人皇七代 孝靈天皇
四十五年牛頭天皇元年神勅有て尾張國海部郡 今海東郡
玉く茅を以葺給ふ殿后 欽明天皇元年神勅有て尾張國海部郡 今海東郡
門眞名井神給ふ神童一ツ小接ふ戰馬州ふ年茅久しく鎮座ませり
ふりく遷座の後も之宮ふ改ふく津島天王と称ふ又地名も藤波を
發しく津島波と称ふく後世永祿天正の比贈正二位右大臣織田上總介平
信長公遠征ふり發向しく織田及び東海東山兩道の諸ふ被ふり仰付
しく平天下の瑞あるべし

津島紀略

寛政癸丑の夏月尾張の國愛智海の里中村氏のまうふうて
ほ宮のやまひの見ふありやを姫田氏をあふぎ奉せる紀 正德年中
のかりそめ ともふされふ山記ふ來由議論を主みしく行疫ふ
おもてうくふあてあれし人ふはさしくえる訓を拳くまとの沙ふ
ふ記ふようて要をほこをるにより柿山素ふ去の御神人氏の老穂ふ後しを
澤と編集ふ数ふふ真名をもりてむひとふ故ふ
試樂とふみをふ信樂と唱ふべしと神宣記ふありくふの記ふそう
うり八日ふ建ふ毎町の車屋ありくふ 試樂を 六月二日
も祥ふ祭ふ十二日ふ至くふ江口日ふくふ 鴨の試樂一 兒

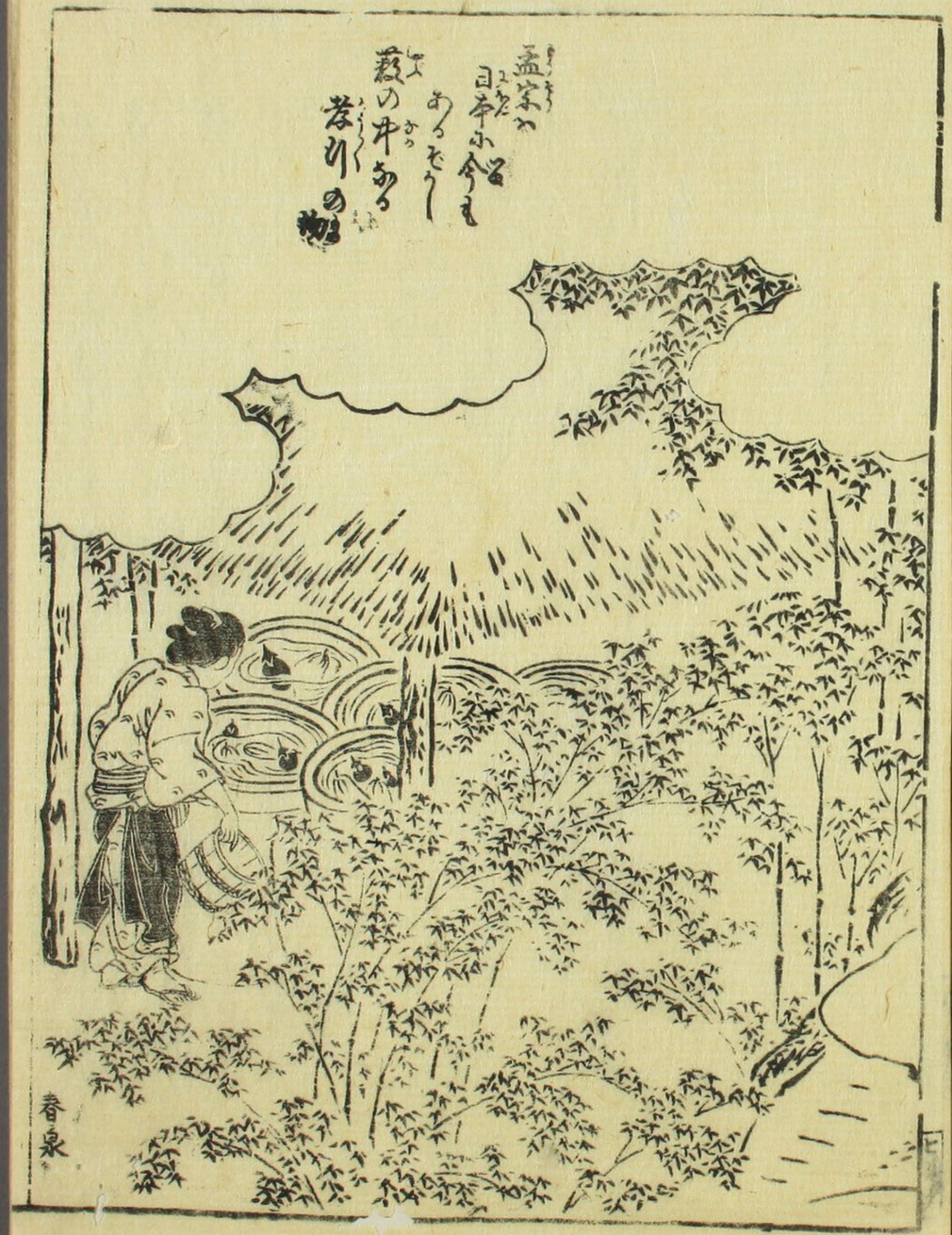
延喜式討くふ以を四海ふ輝を東津祖の生うふ此一當社ふ天王の神威ふ
尊信一治平安民の擁護ふ祖ふ社頭ふ經営一事式ふ載事そう一
ふまれとほ當事といふくふ遠近の壯觀とあるみか是四海の浪穩た
しく平天下の瑞あるべし

尾洛 岡田子葛陵述

まづ賀茂の祭の車樂五輛 記文には鏡山 猩々 靱猿 猿の五色とあり 今は猩々の五色にて 赤一艘 人
あそびのさまにて 次は桃燈を掲る車にて 記には高川水とあり 青地に浪の形を
小掛ると十二ひとへ 月の数なる楠の四方をそろへたる 次は松と竹と
梅と今様をかゝれたる 次は松竹梅をそろへたる 次は
柏もいろ〳〵ありて 笹の名ある事にや 次は
太鼓の四ツ台也 於保と唱へ 次は
市腹に今様 次は
漕出す 次は
棄まで 以上五輛の車樂相従ふ 次は
名ごりをしく 次は
そこは 次の車樂五輛 同じ 次は
ありて 市腹よりも 車五輛を引 漕出す
荘る所の地形を解く 次は

車樂の荘 次は
いつ是より車樂のことはあり 次は
〳〵幕 次は
先をもむる 次は
車も 同〳〵 下毛氈 次は
幕 次は
同〳〵 次は
真ふに定まりて 次は
標 次は
その里 次は
まゑ〳〵 次は
漕 次は
ともに 次は
御社 次は
次る 次は


度くの
社の神祭れ
我の汗こ紅生の
血茶ふこそ我
ふ後もこー祭田
の村事こそれが
調進れ諸云
あれとるん我の
中の者の也こ
と


孟宗か
日本ふ今も
あるそう
我の井ある
若狭の物
春泉

萱津の東宿のまくさ刈りそこ庭の人あり待てど来まさず

はろばろに思ひをやりて今日ゆくと君が言ひてし名を思ひつつ

住吉の岸のあご松ひとりだに君しまさねば恋ひつつぞ居る

人目守りつつんとすれど我妹子が家はさもの見えくれば恋ひ

我妹子が色香も染めぬ赤人のいつきまつりて染むる衣ぞ

阿波の浦 萱はのやうむしろ 古畑をう

名ぶたてるあそれ浦の海士さえも見るめうるくて袖ぞ

波吉 汐ふる社のひさまくありやも毎朝

つる恋はありその浦ゆ寄せ貝むかしくの袖ぞ

後吉 よるべのふく山もるも名をそるおりそのの浦ゆ海をの焼火

新千 浅茅おいその浦ふるくおたつる刈る人をそ待

乳隆寺 徒ふるといふりそ今はありまれそそ

阿波の社 阿波の神祠の神葉を

いてあるくし

うら欲しく人もあるを名ばかりを

遠保百首

徒そつる身ぞうらみをそのこのそのそ

阿波の神祠 阿波の社ふあり又栗殿社と書俊寛僧正法禅ともいふ

社伝説ふ云 祭神伊弉諾伊弉冊の二尊 土人云むかし神供とて又海をの物を

栗殿と称ふ 穀及び瓜茄子根の

もろもろの物も 垣籠の初穂 神供とて又 畑田の粳米 糸 並びに

べく其初生を 神酒を 献る 又 神輿に載

国中の人口ふ贈答 せ 遠征

反魂家 阿波の栗ふあり むかし久しく帰らず妻あり

里ひ懐中ふ守札現 東岩居社 藤女の墓

豊秀吉公出誕古蹟 尾州海東郡上中村 中村ふ大剛山常泉寺 日宗の寺あり毎年

八月十八日 豊太閤薨所の日法遊あり 若宮 九町許

阿波の出生所も山もの瀬村下の中村

ふ俗阿波ふ又瀬踏俗須賀 真外尾州

出生の諸度ひやうふ古跡多し

異稿日本傳曰

萬暦十九年 日本天正十九年 大明之時秀吉公薨下 雁書薫讀巻舒再三 率兵超入

閣下 雁書薫讀巻舒再三 朝鮮國王 朝鮮法師

抑本朝難為六十餘州比年諸國分離乱國網

廢ス世禮ヲ而不レ聽ニ朝政ヲ故ニ予不レ勝ニ感激ニ三四年之間伐ニチ叛臣ヲ討ニスレ賊ニ徒ノ及ニ異域ニ遠嶋ニ悉ク歸ニ掌握之一窮ニ拔ニ也雖レ然予當ニテ干ニ抏胎之時一慈ニ監ニ乎母夢ノ日蹟ノ鄙ニ陋小臣ニ懷ニ中ニ相士ノ曰ク此レ兒必ス八ニ表ニ聞ニ八ニ風ヲ四海ニ威名ニ者其何ニ疑乎ニ壯年ニ有ニ奇異ヲ作ニ敵ニ公心ヲ者自然ニ摧滅スレ戰則無ニ孤獨ニ勝メ下ニ大ニ治ル撫ニ育レ百姓ヲ隣ニ好ニ來ニ萬ニ倍ス千古ニ矣本朝開闢已ニ千世ニ不レ滿レ百年ニ焉ク今日ニ也夫人生ニ居レ此ニ乎世ニ故ニ攻ニ民ニ富ニ財ニ足ニ土貢ニ萬ニ國ニ海之遠ニ如ニ今ニ焉ク久々ニ矣ク故ニ朝ニ廷盛ニ車ニ洛陽壯ニ來ニ麗莫レ如ニ今ニ焉ク超ニ直入ニ大明ニ國ニ易ニ之ニ拔ニ時ニ慈ニ照ニ監ニ乎ニ母夢ノ日ク